

公に封す會、軍中大に疫し士卒多く死す天祥か母亦病んで没し子道
生復た死し家屬俱に盡く天祥潮陽に屯す鄒淵、劉子俊皆師を集めて
之に會す元將張弘範亦潮陽に逼る天祥力支へす其麾下を帥めて逃れ
五坡嶺に至る元人追蹤群至す衆戰ふに及はず皆頓首して降る天祥執
へられ死せんとて腦子(藥名、性極めて毒、多食すれば死す)を呑む死せず鄒淵自殺す
劉子俊自ら詭りて天祥と爲り之を免せんとす天祥已に執はるゝに及
びて子俊遂に烹らる天祥執へられて潮陽に至り弘範に見ゆ弘範縛を
釋き客禮を以て之を待つ或人弘範に謂つて曰、敵人の相測るへから
ざる近くへからすと弘範か曰、彼は忠義の人なりうの他なきを保す
と族屬の俘せらるゝものをば之を還せり

弘範潮陽より舟に乗して海に入り道に斥候を獲て宋主の厓山に泊す
るを聞き之を襲ふ宋將張世傑力戦して之を拒き善く戦ふ弘範之に苦
む時に世傑の甥韓と云ふもの元の師中にあり弘範三たび韓をして宋

師に至り世傑を招かむ世傑従はずして曰、吾れ降らば富貴ならん
ことを知るも但、義移すへからすと古の忠臣を歴數して之に答ふ弘
範乃ち文天祥に命し書を爲りて世傑を招かむ天祥應へて曰、吾れ
父母を扞ること能はず乃ち人を教へて父母に叛かむへけんやと遂
に過ぎし所の零丁洋(廣州香山縣の東にあり)の詩を書し之に與ふるの末に云ふあ
り人生自古誰無死、留取丹心照汗青(古人火にて竹簡を炙り汗と山さし
め取りて字と書す之を汗青といふ)
と弘範うの強ふへからざるを知り笑ひて之を置き復た人を遣り厓山
の士民に語りて曰、汝か陳丞相(陳宜中)已に去り文丞相も已に執は
る汝等何を爲さんと欲すとて之を諭しくも亦一人の叛するものな
弘範又舟師を以て海口に據る宋の師樵汲の道絶えて兵士は乾糧を茹
ふこと十餘日大に渴せしか爲め海水を掬して之を飲む水甚た鹹し飲
めは則嘔泄す兵士大に困む世傑は蘇劉義、方興等を勵し旦夕大に戦
ふ元の李恒廣州より師を以て會し攻む弘範乃ち恒をして厓山の北面

を守らむ時に世傑の將陳寶叛いて元に降る元人進んで世傑か舟に
 逼る弘範またうの軍を四分一自ら一軍に將と相去る里許り諸將に
 令して曰、宋の舟西の方厓山に懸す潮至らば必ず東に遁れん急に之
 を攻めて去ることを得せしむるなかれ吾か樂の作るを聞かば乃ち戰
 へ令に違はんものは斬らんと先づ北面の一軍を麾き早潮に乗じて
 戰ふ世傑憤戰之を敗る李恒潮に順ひて師を退く午潮來り元の師樂作
 る宋の師之を聞き元軍懈ると爲し備を設けず弘範舟師を以てうの前
 を犯す南師之に繼ぐ宋軍南北より敵を受け兵士皆疲る復た戰ふこと
 能はず俄に一舟の檣旗仆れ諸舟の檣旗亦皆仆る世傑事の去ることを
 知りて精兵を抽て中軍に入る諸軍大に潰へ翟國秀、凌震等皆甲を釋
 きて元に降る元の師宋の中軍に薄る會ま日暮れ風雨して昏霧四に塞
 がり咫尺を辨せず世傑乃ち蘇劉義と維を斷ち十六舟を以て港を去る
 陸秀夫また帝の舟を走らす舟大に諸舟次第に環り來るを以て到底出

て走るを得ざるを度り先づうの妻子を驅りて海に入れ帝に謂つて
 曰、國事此に至る陛下まさしく國の爲めに死すへ（德祐皇帝 德祐は年號也）
 辱めらるること已に甚し陛下再び辱しむへからすと遂に帝を負ひ海
 に投じて溺死す後宮諸臣從死のもの甚た衆し餘舟尚ほ八百ありしも
 弘範か爲めに得らる數日を越えて屍海上に浮ふもの十餘萬人困りて
 帝の屍及び詔書の寶を得たり

已にして世傑復た厓山に還りて兵を收む偶、楊太后に遇ふ之を奉り
 て趙氏の後を求め立てんと欲せしが太后帝の崩せしことを聞き膺を
 撫て大に慟して曰、我れ死を間關に忍んで此に至るものは正に趙
 氏の一塊肉あるか爲めのみ然るに已に此の如く今望なくと遂に海に
 没す世傑之を海濱に葬り將さる安南に趨かんとして平章山下に至
 りて颶風大に作るに遇ふ舟人岸に懸せんと欲せしかは世傑之を止め
 て曰、以て爲ることなかれと自ら柁樓に登り香を焚き天を仰き呼ん

て曰、我れ趙氏の爲めにすること亦已に至れり一君亡びて復た一君を立つ今又亡ふ我の未だ死せざるものは敵兵退かば別に趙氏を立てんと欲せしのみ今此の如く豈に天意か若く天復た趙の祀を存することを欲せされは大風吾か舟を覆せよと言未だ畢らざるに舟遂に覆り世傑溺れて宋亡ひたり宋は太祖より此に至るまで凡そ十八世三百二十年にして社稷絶は元遂に天下を統一せり時に我か紀元千九百三十九年後宇多帝弘安三年に相あられり

元

李羅天祥と詰る 元兵我が日本に入寇す

元の至元十六年(我か紀元千九百四十年)宋の丞相文天祥を擒にして燕京に至る丞相李羅召して樞密院に見る天祥入りて長揖す跪かゝめんとせしも屈せずして曰、天下の事廢あり興あり古の帝王より將相に及ぶまで

滅亡誅戮せらるゝ何の代にか之れなからん天祥今日宋氏に忠を致して此に至る願はくは早く死を給へよと李羅曰、汝廢興の説を唱へるか盤古帝王より今日に至るまで幾帝幾王ぞ一一我か爲めの之を言へと天祥曰、一部の十七史何れより説き起さん吾今博學鴻詞に應するにあらず何の暇ありて泛く論せんと李羅曰、汝興廢の事を説かすは我れ又聞かん古よりこのかた人臣と爲りて宗廟土地を以て他國に興へて逃るゝものありや天祥曰、丞相は予の前に宰相と爲りて國を賣り人に與へて後ちに去るものと思へるか國を賣るものは利する所ありて之を爲す故に去らざるなり去るものは國を賣るものにあらざるなり予前日伯顔か軍前に使ひ拘留せられしときに賊臣已に國を獻し國亡へり吾か職として死すへり而るに死せざる所のものは度宗の二子(懿王 昀 昀)浙東に老母の廣にありしか故なりと李羅又詰りて曰、徳祐の幼君は爾が君にあらずや嗣君を棄てて二王を立てるは是れ忠な

るやと天祥か曰、徳祐、吾君といへとも已に國を失へり此の時に當りては社稷を重くと爲し君を輕くと爲す吾別に君を立つることは宗廟社稷の爲めに計るなり彼の懐愍漢の爲めに執へらるに従ひて北せしものは忠にあらすして元帝東晉の帝に従ひしものを忠と爲す徽欽徽宗に従ひて北せしものは忠にあらすして高崇南宋の帝に従ひしものを忠と爲すと孛羅語塞る又曰、汝二王を立て、何事を做す天祥曰、國家不幸にして喪亡す吾か君を立て宗廟を存す存すること一日なれば則ち臣子一日の責をつくす人臣の君に事ふること子の父母に事ふるが如し父子疾あるとき甚た爲すべからすと雖も豈藥を下さくるの理あらんや吾か心をつくして爲すべからざる時は天命なり今日天祥此に至る死あるのみ何う必ずしも多言せんと孛羅怒り命して一小土室に幽す廣さ八尺深さ四尋可り單扉低小白間といへも幽暗なり天祥此に坐臥し足地を履まざるもの殆と三年正氣の歌を作りて己か志を

述ぶるの詞數十百言忠義の心詞表に見はれ今尙ほ讀者をして凜然たらしむ元主ろの人と爲りを稱し之を用ひんと欲し人を以て論さしめて曰、汝が宋に事ふる所以のものを移して我に事へは當さに汝を以て相と爲すへいと天祥對へて曰、天祥は宋の宰相たり安ろ二姓に事へん願はくは一死を賜へば足れりと元主之を釋さんと欲せしか適ま中山の狂人自ら宋主と稱し數千人を率ゐて文丞相を奪はんとするに會し元主遂に左右の勸によりて之を燕京の柴市に殺す天祥刑に臨み従容として吏卒に謂つて曰、吾事畢ると南向再拜して死す年四十七ろの衣帶の中の賛に云へるあり孔曰「成仁」孟子曰「取義」惟其義盡、所以仁至、讀聖賢書、所學何事、而今而後、庶幾無愧、と其妻歐陽氏の屍を收む尋いて張毅甫と云ふもの天祥の骸骨を負ふて歸り吉州に葬る會、家人亦惠州より母夫人の柩を舁ひて同日に至る人以て忠孝の感する所と爲す天祥か子已に亡びしを以て遺命して弟璧の子叔子を以

て後と爲さしむ天祥は廬陵の人居る所文筆峯に對す自ら文山と號す人ど爲り豊下俊爽兩目炯然として博學詩文を善くす童子の時學宮に祠る所の郷先生胡銓等の像皆忠と謚するを見て欣然之を慕うて曰、没してうの間に俎豆せされは夫にあらざるなりと弱冠の比廷對を奉り君道の大本經世の急務を陳ぶ文思神發萬言立どころに就れり獄中書はす所の歌詩其他集杜詩百首、金嘯集等數種あり後ち兵馬司の遺著を元主に上り觀るものうの忠膽義心を感じせざるはなし又うの嘗て穿ちし所の一履を得たるものあり之を寶藏せしと云ふ

是より先き世祖己に宋を滅し我か日本の其使者杜世忠等を斬戮すと聞き大に怒り右丞相阿剌罕、范文虎等に命して師十萬高麗の兵一萬軍艦四千艘を以て往かしむ阿剌罕途中に死し阿答海を以て之に代はらしむ未だ至らざるに文虎等己に海を蔽ひて來寇し壹岐を取り博多に向ふ舳艫相衝む己にして五龍山に據り平壺島に薄る我か國は鎮

西、中國、四國の兵馬を發し筑肥の海濱に羅布して之を拒く元巨艦を連鎖し高樓を起し巨礮を以て我か石壘を俯射す時に北條實政と云ふものあり兵を督し岸を壓して陣し元艦を下視す部將草野七郎と云ふもの夜襲うて元艦を焼き十餘人を殺獲す元兵悉くうの舟を聚め鐵鎖之を連ね弩を設けて我を射る河野通有と云ふもの輕舟を以て進む矢うの左肩に中るも顧みず遂に進んで元艦に登り數十人を殺し敵將王冠と云ふものを獲我兵繼ぎて進み力戰殺獲頗る多く敵を以て遂に陸に上る能はさらしむ一日大風俄かに起り波濤怒號して山を捲き敵艦殆ど敗れ沈溺算なし范文虎等の諸將恐れて各堅艦を擇ひ之に乗し遁れ去る殘卒遁れて松浦の鷹島に據り張百戸と云ふものを推して帥と爲し木を伐り舟を作りて歸計を爲す少貳景資等の諸將規ひ知り掩撃して之を殲す元兵生きて還るもの僅かに三人と云ふ時に至元十七年八月にして我か紀元千九百四十一年後宇多帝弘安四年閏七月一

日なり『世祖之を聞き大に怒りて再ひ我を征せんと欲し先づ使者を遣はして往き諭さしめんとしたりしが果さず又阿答海及ひ高麗王に命じて再征の計を爲し各路に詔して軍備を修めしめしより群盜蜂起し四方騒然たり且つ占城交趾に兵を用ひたりしは吏部尚書劉宣の諫によりて日本再征を中止したりき時に我か紀元千九百四十六年なり

健德門の變

武平の地震

是より先き益都千戸の王著と云ふもの左丞相阿合馬を殺す初め阿合馬、政に参り人心に逆ふを以て王著之を憤怒し密かに大銅鎚を鑄る僧高和尚等と之を殺さんと謀る時に太子帝に従ひて上都世祖開平府を以て上都と爲す燕京の北數百里に在りに如き阿合馬京師に留守たり著、太子の素より阿合馬か姦を惡みしを以て西僧西人の二人を遣はし中書に至らしめ詐はり

て太子都に還りて佛事を作すと稱し且つ太子の命を矯りて樞密副使張易をして兵を發して夜東宮に會せしむ易察せず兵を以て往く時に高鱗、張九思等官中に宿衛せしを以て易は之に太子來りて阿合馬を誅すと告げしは高、張、之を信し出でて迎へ皆偽太子の殺す所と爲る偽太子及王著等の馬を奪ひて進んで健德門に入り人を以て阿合馬を詰責せしめ遂にその鑄る所の銅鎚を以てその腦を碎く門卒俄かに諜き呼んで曰、賊なりと急に衛士を叱して之を捕へしむ衆大抵擒に就く高和尚逃げ去る惟た王著身を挺んで囚れんことを請ふ時に帝察罕腦兒に在りて變を聞き和禮、霍孫等をして亂を爲すものを討せしめ高和尚を高梁河に獲たり王著と張易とは棄市せらる著、刑に臨み大呼して曰、王著は天下の爲めに害を除いて今死す他日必ず我か爲めぬの事を詳記するものあらんと後ち帝の罪惡を知り始めて大に怒りて曰、王著か殺しは誠に是なりと命じて阿合馬

の塚を發きうの棺を剖いて屍を通玄門外に戮し犬を縦ちて之を食はしめうの党を窮治せり天下之を聞き皆快と稱す右丞盧も幾はくならずして誅せらる世榮嘗て中書に入り自ら謂ふ財を生ずるには法ありうの法を用ひは賦歛倍増するも民苦まさるへと翰林學士董文用か曰羊を牧するものは歳に兩たひうの毛を剪る今牧人日に剪りて献せば主人うの毛を得るの多きを悦へとも然れども羊は寒熱を避くる無くして既に死し且盡きて毛また得へけんや民財限りあり然るに日に之を剪るうの患はかるへからずと世榮語塞かる然れども政を專に苛刻を行ひ民を擾るを以て誅せらる

時に江南の兵起り廣東、浙江、等の民衆萬餘を擁して亂を作す初め尙書平章政事桑哥と云ふもの政に預り六部（兵、刑、戸、禮、工、吏）を以て百司倉庫の財穀を鈎考せしめ又參知政事忻都等を以て諸路耗失の數を理算せしめ更に徵理使を置き諸路の錢穀を徵さしむ後ち河北十七郡蝗あり

且つ日食地震する甚し武平の地尤も震ひ地陷りて黑沙水涌出し官署を壞るもの四百八十餘民居は計ふへからず壓溺して死傷するもの數十萬人帝大に憂ひ左右に災を致すの由を詢ふ皆桑哥を畏れて敢て時政を指切するものなり桑哥已に天下の錢穀を理算し民を聊んせざるを以て集賢學士趙孟頫（頫音は）帝に見えて租賦を蠲降せは天變弭むへしと奏し帝之に従ひ詔草已に具るとき桑哥入朝して曰此れ帝意にあらすと大に怒る孟頫從容謂つて曰錢穀を徵さんとするも民死亡せは如何ともするなり今の時之を除免するにあらざれば他日事を言ふも倘し失陷あらは咎を尙書に歸せん豈丞相の深累たらずやと桑哥大に悟り遂に天下にゆるす民大に喜ふ

然れども桑哥か錢穀を鈎考せし故を以て中外騷擾やます趙孟頫奉御徹里に謂つて曰桑哥の罪惡已に著はる我等言はずんは他日何を以てうの責を辭せん子は帝の爲めに親信せらる一旦の命を捐て萬姓

の爲めに殘賊を除くは仁者の事なりと徹里之を帝に言ふ詞語甚烈、帝の大臣を毀詆すとなし衛士をしてその頰を批撃せしむ血、口鼻より迸出、地上に委頓す少らくしてまた帝に謂つて曰、臣も桑哥と讐なき力めてその罪を數へて身を顧みざる所以のものは國家の爲めに計るのみ苟も聖怒を畏れて言はずんは姦臣何の時にか除き民害何の時にか息まんと常大に悟り更に翰林學士不忽木を召し之を問ふ對へて曰、桑哥、朝政を紊亂しその非を言ふものあれば之を誣殺す今百姓業を失し盜賊蜂起す亟かに之を誅せずんは恐らくは陛下の憂を爲さんと廷臣またその罪を言ふもの益々多し帝遂に桑哥の家を籍没す珍寶を得ること内藏の半の如し尋ひて誅に伏し徵理司を罷む詔下るの日百姓相慶しまた騒動せざりき

枋得燕京に執はる

許衡の遺誠

帝宋を平けて後ち程文海をして江南の人才を訪求せしむ趙孟適、葉季、趙孟頫、伯淳等の數十人を得皆已に擢用せり是に至り文海また宋の遺士三十餘人を薦む謝枋得もまたその列にあり「時に枋得方に母の喪に居る書を文海に遺りて曰、某の死せざる所以の者は九十三歳の母ありしを以てのみ今已に世を棄つ某今より人間の事に意あらず亡國の大夫は與に存を圖るへからずと之を辭す宋の降將留夢炎亦力めて之を薦む枋得また書を炎に遺り辨論凡そ數千百言卒に行かず福建の參知政事魏天祐枋得を得て己れか功と爲さんと欲し強ひて執へ北行して燕京に至る枋得遂に死を誓ひ少かに蔬菜を茹ひ困疲して卒せり其北行の前一日妻子友人に示す所の詩に云ふ雪中松柏愈青々、扶植綱常在、此行天下久無龔勝潔、人間何獨伯夷清、義高便覺生堪

捨禮重方知死甚輕南八男兒終不屈皇天上帝眼分明（魏時は漢末の節
けしきて王莽に仕へざりし人安祿山の亂に叛逃し南
漢書と呼びて南八男兒といへり上巻と參照すべし）と初得平生書として讀
まざるなく文を作る高邁奇絶自ら一家を爲す著はす所の詩傳註疏あ
り妻子昆弟大抵執へられて殺さる人々の節義文章を以て文天祥と並
へ稱す而して趙孟頫の宋の宗室を以て元の仕ふるを譏る孟字は子昂
書畫精絶なり時に集賢大學士許衡年七十三にして死せり衡はもと
新鄭の人元に仕へて大に爲す所あり嘗て言ふ學を爲すものは生を治
むるを先務と爲す苟も生理足らされは學を爲すの道に於て妨くる
所あり彼の旁く妄進を求め官と作りて利を嗜むものは殆ど亦生理に
窮するの致す所なれば士君子もまた農務を以て生と爲すへし商賈は
未を逐ふと爲すといへとも亦爲すへきあり果して之に處して義理を
失はされは或は姑く一時を濟ふも不可なりと又曰人心は印板の如
し板本差はされは千萬紙を摹すといへとも皆差はすと其死に臨みろ

の子に謂つて曰我死後謚を請ふなかれ但許某之墓といふ四字を
書いて子孫をしてその處を知らしめは足れりと卒するに及んで碑な
し朝野哀傷して斯道斯民の不幸と爲さくるはなほ後ち魏國公に進封
せられて謚を文正と賜へり劉因は保定容城の人經學を以て著はる
帝嘗て其名を聞き集賢學士と爲さんとせしかは因疾を以て固辭す
帝の曰古に召さるるの臣ありと遂に強ひて致さしめざりき是よ
り先き皇后弘吉刺氏薨す初弘吉刺の族太祖に従ひて兵を起して功あ
り尋いて立てく皇后と爲し遂に與に約して曰弘吉刺氏女を生まは
世々后と爲さんと故に世々の諸后その族多し后賢明帝を輔くる少
からず

帝の晩年安南入貢す是より先き緬國瓜哇交趾等の南夷正朔を奉せ
ざるを以て師を出し之を征伐せしか是に至りて皆服従せり故にろ
の中原以外天山南路より波斯小亞細亞及び地中海等皆その版圖に

屬せり伯顔曩きに久しく北邊に軍せしも尺寸の功なるとて之を呼び還し皇孫鐵木兒に詔して太傅、玉昔帖木兒をして輔行として之に代はらしむ皇孫宴を張り伯顔に謂つて曰、公此行何を以て我に教へんと伯顔酌む所の酒を舉げて曰、慎むべきものは惟く此れと女色のみと、幾はくならずして帝崩す、在位三十五年改元するもの中統、至元といひ廟を世祖と號す國語に薛淨皇帝といふ帝晚年西僧を延き大に喇嘛教を信するの教は佛教の部類にして専ら祈禱禁咒を爲すものなり元の其教を尊ひたるは西北慄悍の民俗を治めんとするにあり宣政院を設け之に僧侶を班次し政事に參せしめ八思巴の如きは稱して帝師と爲し之に玉印を授け國師には金印を與へるの宣命をして詔勅と並ひ行はしめ後代の弊を慮き起したること鮮からず又寺塔佛刹を設け大に國財を費せり儒學を崇ひ蒙古新字を新作すと雖も尤も重する所は宗教にあり蓋し元の天下を有つ殊方絶域を賓服し輿圖の

廣き前古無き所といへとも世祖の約束には漢人を以て相と爲さず相と爲すものは大抵國族にして諫官を置かず忠直をして路塞からしめ文學の士乏しからずといへとも下僚に沈みうの用を究むる無し頼りて用を爲さしむる所は吏師のみ吏師は阿合馬桑哥の如き拮克聚斂の臣にて末年の政大に非なりき皇孫鐵木兒帝の崩を聞き還りて位に即く是を成宗皇帝と爲す時に我か紀元千九百五十六年伏見帝三年にあたり

僧一山我か日本に來る

西南夷を伐つ

帝即位して前朝の弊政を救はんと欲し主として中外土木の役を罷め勤儉是れ事とし大に陝西の旱凶の民を賑せり、時に太傅録軍國事伯顔卒す伯顔深沈にして謀略あり二十萬衆に將として宋を伐つ一人に

將たるが如く諸將之を仰く神の如く軍功あるも歸來するの功を言はず
帝悲慟忠武と諡せり

是より先き世祖の時我が日本に敗北せしより元の君臣皆我が報せんとするの念止まず高麗をして俘虜を送りも修好せずんば復た兵を受くべしと告げしむ北條貞時之を拘留せり後に用兵の念を止め我が佛教を崇信するを以て僧を遣はし我を教誘して之を屬せんと謀る是に至りて僧一山を遣はし我に使せしむ而れども我が日本報せざりき我國史傳ふる所に據れば北條貞時一山一山は一作一山は國命を密承し我の間諜する者と爲し伊豆に流謫す既にして其碩徳なるを聞き之を赦して建長寺寺に附るに住せしむ一寧大に教化し名僧輩出せり元竟に志を得ず因りて我が寄留人を捕獲して凌虐す亦益なくして止み商船の往來復た通すといふ時に元の大徳三年にて我が紀元千九百五十九年伏見帝の永仁六年なり

後ち數歳を歴て雲南の省行左丞劉深の言に因りて西南夷八百媳婦を伐つ劉深か兵順元に次す遠く烟瘴を冒して未だ戦はざるに士卒死するもの已に什の七八民を驅りて谿谷の間に轉餉す一夫つゝ粟を負ひ數十日にして乃ち達す死するもの數十萬人中外騷然たり蠻酋宋隆濟、蛇節等遂に兵を連ねて反し進んで貴州を攻め深を窮谷の中に圍む乃ち劉國傑及び楊賽、因不花等をして應援せしむ劉深糧盡き道梗かりて通せず遂に兵を引き還る隆濟等追躡して之を苦しむ西南夷鳥撒、芒川、東川、武定、威楚、普安、の諸蠻蛇節の亂に因りて叛く幾はくならずして平く劉國傑は宋隆濟、及び蛇節を黑持川に敗り擒へて之を斬り餘党相繼いで平く劉深亦誅に服す』時に蘭谿の處士金履祥と云ふもの卒せり履祥は朱子の傳を得宋の末路意を進取に絶ち金華山中に屏居し通鑑前編其他論孟大學諸經傳及び禮樂等に至るまで各註疏あり門人許謙、之を傳録す祥死して文安と諡す人之を金山先生

といふ又岳鉉等大一統志を進んで賜賚あり平陽地大に震ひ民居
 摧毀し又屢天變地妖あり帝位に即き後兄答刺麻八の子海山
 を出たして漠北を鎮せしむ皇后伯岳吾氏また帝に勸めて哈尙の弟愛
 育黎拔力八達どうの母とを出たして懷州に安置せしめ子德壽を太子
 とせしか幾はくもなくして薨す帝在位十三年にして崩す時に海山
 の後を嗣くへきに皇后の弟母子を安置せし怨を報せんことを恐れ
 安西王阿難答を召し立てんと欲し群臣をしてその意に従はしめ海山
 の歸路を斷ち安西王を立てく已れ簾を垂れて政を聽きしか右丞相哈
 刺哈孫之に反對して内難を平け皇后伯岳吾氏を廢して海山を迎へ立
 つ是を武宗皇帝といふ時に我か紀元千九百六十八年なり蓋し成宗は
 即位の初めは世祖の弊政を改めてその守成に功ありしも晩年國家の
 大事は官壺權臣に委し祚幾んと傾くに至りたり

西僧の跋扈

仁宗の治世

武宗即位して直ちに伯岳吾を廢して之を殺し安西王及ひろの党を誅
 戮し母弘吉刺氏を尊ひて皇太后と爲し弟愛育黎拔力八達を皇太子と
 爲す又孔子に尊號して大成至聖文宣王といはしむ中書省の臣等奏
 じて曰、法は權衡の如し偏重せしむべからず世祖已に定制あり元貞
 (成宗)以來佛を信するの故を以て有罪を放釋し大寛に失すと帝之に
 従ひ世祖行ひし所の條格を遵守し又答刺罕合刺哈孫の定むる所に従
 ひ官吏の贓罪十二章を定む處士蕭尙を徵して太子の右諭徳たらし
 む尙は陝西奉元の人、力學を以て三十年仕へ篤行あり郷民一夜盜に
 遇ふるの事詭りて曰、我は蕭先生なりと盜驚愕して去ると云ふ
 帝法制の變更を試み稍や政事の弊害を遺せるなきにあらずといへど
 も晩年西僧を昵近し宦官を以て中書に居らしめしが如き大に史家の

譏を招けり。晩年西僧教瓦班を以て翰林學士と爲じ、かば其徒上都
 にあるもの跋扈甚しく嘗て強ひて民薪を市ひるの利を專にす。民之を
 留守李壁に訴ふ。李壁西僧を召し之を詰る。僧已に党引いて白挺を持し
 公府に亂入し。李壁の髪を引き地に仆し。擁扑交下して之を空室に墊
 す。李壁脱れて之を朝廷に訴へし。も朝廷亦不問に付せり。僧徒龔柯等之
 を諸王合兒入刺か妃と道を争ひし。とき妃をひいて車より墮して之
 を毆つ語、帝を侵せし。も亦釋して問はず。宣政院、旨を奉りて言ふ。西僧
 を毆つものは其手を斷たん。嘗るものは其舌を截らんと。後ち太子廐、
 争ふを以て其令遂に廢す。帝在位四年にて崩す。皇太子愛育黎拔力八
 達位に即く。是を仁宗皇帝と爲す。時に我か紀元千九百七十二年花園帝
 應長元年にあたり。

仁宗帝即位以來民力を愛養し。孜々として治を計り。先朝の時舊章を變
 亂し。毒を百姓に流し。太師脱虎脱等を戮し。凡て國を誤るものは按し
 て之を誅せんと欲せし。かば延慶使楊朶兒只諫めて曰、政をなすに首
 として殺を尙ふは帝王の治にあらず。帝因りてうの尤なるもの脱虎
 脱、三寶奴、樂實保、八王罷等を誅し。忙哥、鐵木兒を海南に流す。既に
 して又中都に城くことを罷む。武宗の末年司徒蕭珍中都に城き功を徼
 して民を病ます甚しきを以て是に至りて之を罪し。凡て中都の括する
 所の民田をは悉く民に還さしむ。

帝又先朝の政務を諳知する老臣を召し。程鵬飛、薰士選、李謙、張驥、陳
 天祥、尙文劉正郝、程文海等數十人闕に諸り。庶政を議し。大に補益する
 所あり。帝頗る儒術を重んじ。國學に詣り。自ら諸生を課試し。うの徳業
 を勉めしめ。又貞觀政要、大學衍義を譯するに國語を以てし。板行して
 諸王以下に頒布せしめ。其他周敦頤、張載、朱熹、許衡を以て孔子に従
 祀せしむ。嘗て近臣に謂つて曰、百姓を安んじて至治を圖るは儒士を
 用ふるにあらざれば何う至らん。科を設け士を取らば眞儒の用を得て

治道に益すべしと』晩年に武宗の子和世球を立て、周王と爲し雲南に屯せしむ初め帝太子に立ちし時丞相三寶奴及び康里脱に等と和世球を立てんと勸む丞相鐵木迭兒帝の寵を求めんとして皇子碩德八剌を立てんと請ひ太后の幸臣失烈門と王を帝及び母太后に讒す時に和世球は延安に次せしか其臣秃忽魯及び武帝の舊臣教化等謀りて曰、天下は我が武宗の天下なり王の出で、鎮するはもと帝意にあらす讒構に由りて然るなり請ふ之を朝廷に聞して離間者を誅せんと陝西の丞相阿思罕、其他脱里伯、脱歡等と關中の兵を發し道を分ちて潼關河漢北に走れり』右丞相鐵木迭兒勢を恃みて貪虐甚し内外の罪を惡み車裂して天下に狗へんと請ふ帝震怒す迭兒太后の宮に匿る帝太后の意を中傷するに忍ひするの相位を罷めたりしか後ち年餘ならずして太子の太師たり中外駭きて彈劾するもの四十餘人に至りしも太后

の故を以て皆聽かず帝在位九年にして崩す帝天性恭儉至孝儒術に通達し兼ねて釋典に通ず嘗て金字の佛經を寫し鉅萬を糜す而れども奢靡を禁し農桑を勵まし常に祖宗創業の艱難を惟ひて己れ成を守り百姓をしてその所得せしめざるを畏懼せり世呼びて守成の良主と爲せり太子碩德八剌立つ是を英宗皇帝と爲す時に我が紀元千九百八十一年にて後醍醐帝應元二年に當れり

鐵木迭兒の專恣

英宗佛寺を起す并に南坡の變

英宗即位の初年鐵木迭兒太后の命を以て中書に入り賀勝及び朶兒只等等の己れに違ひしを以て之を殺しまた己れの仇怨を懷きしものは日々按問して誅戮止まず其他京にある諸路の歲貢幣帛の稍、遲滯誤謬するものを徵理して債を所司に責め督責火の如く嚴法峻律日に行

はれしを以て怨聲四もに起る帝制する能はず威權愈盛なりしか後
 ち數年を歴て帝も亦うの權寵を恃み毒を流すを以て之を疎外し平章
 政事拜住に任し委するに心腹を以てす鐵木迭兒因りて疾と稱して出
 てず遂に快々として家に卒し後ち官爵を奪はれ家また籍せらる
 帝甚た佛教を信し嘗て勅して西山の佛寺を建てしむ御史觀音保等歲
 饑る且つ東作(作の農事)の時に當るを以て之を切諫せしかは帝怒りて
 之を殺す又壽安山寺の佛像を作り銅五十萬斤を費す又帝師をして
 西蕃に往きて戒を受けしめ金千兩銀四千餘兩鈔幣各鉅萬を與ふ又
 金字經藏を勅寫し翰林學士吳澄をして序を作らしめ自ら灌頂寺に幸
 し佛戒を受く吳澄は撫州崇仁の人經傳に貫通し嘗て學者の爲めに
 言ふ朱子の問學によるの功多し靜子靜は徳性を尊ふを以て主と爲す
 問學も徳性に本かされば其弊必ず言論訓釋に偏せん故に學は徳性を
 以て本と爲すと議者澄を以て陸氏の學と爲す

帝曩きに鐵木迭兒か官爵家貲を追奪沒收せしを以て鐵失等うの党な
 るを以て禍の自ら及はんことを恐る帝晚年上都に如き夜寐の寧から
 ざるを以て大に佛事を修めんとせしが拜住、國用の足らざるを以て
 諫めて之を止む既にして鐵失等の徒陰かに群僧を誘ひて言はしむら
 く國まさに厄あるへし佛事を作し大赦するにあらざれば之を禳ふ無
 しと拜住叱して曰、爾か輩金帛を得るを圖るに過ぎざるのみと其党
 之を聞き愈誅罰の及はんことを恐れて異心を懷く
 帝上都より南に還り驛を南坡に駐む是の夕鐵失は知樞密院事、也先
 鐵木兒、諸王按梯不花等と謀逆して自ら領する所の阿速の衛兵を以
 て外應を爲さしめ已れ進みて先づ右丞相拜住を殺し直に行營を犯し
 帝を臥所に殺す帝節約にして賢を求むといへとも刑罰果斷なるを以
 て此の大變を被れり嘗て大安閣に御して世祖の遺衣を見しに皆縑素
 木綿の補綴せるものなりしかは帝大に嗟嘆して侍臣に言へらく祖宗

業を創めて艱難一服用節儉なること乃ち此の如し朕焉ん頃刻たも之を忘れんやと時に年纔かに二十なりき或人曰、昔劉宋の武帝、乃祖の土障葛燈を見て目して田舎翁と爲くものに比すれば人物の汚隆如何ぞと晉王也孫鐵木兒立つ是を泰定帝と爲す時に我か紀元千九百八十二年なり

鐵失誅に服す 李昌、西僧の姦惡を論す

泰定帝位に即き也先鐵木兒を右丞相に鐵失を知樞密院事と爲す諸王買奴帝に言ふ元凶を誅せされは陛下の善名天下に著はれすと帝の言に従ひ也先鐵木兒、鉄失等の首惡及ひるの党を斬戮し買奴を泰定王と爲し倒刺沙を左丞相と爲さむ又文學の道を開き學士吳澄等を經筵に延き帝範、資治通鑑、大學衍義等の諸書を進講せしめたり時に西臺御史李昌奏して曰、嘗て平涼府の靜會定西等の諸州を過き

しに西僧の金字の圓符を佩ひ途上に絡繹し騎を馳すること數百に至るあり傳舍之を宿すること能はざるときは民舍に假宿して婦女を奸汚す奉天の一路正月より七月に至るまで往返するもの百八十五次馬を用ふること八百數十匹之を諸王行省の使に較ぶれば十に六七多し驛戶控訴する所なし且つ圓符は邊防警報の具たり僧人何によりて之を佩ふるや乞ふ更に驛法を改革せんと帝初め報せざりしか晩年に至りてこの驛を馳せて民を擾すことを禁せり然れども帝佛を信するの心は衰へず與聖殿にて無量壽佛の戒を帝師に受けたり帝後ち上都に如きて崩す^(周王)在位五年なり是の時僉樞密院事燕帖木兒衆に謂つて曰、初め武宗の子一人^(周王)あり然れども周王は遠く漠北にあればその弟懷王を立つへしと強ひて懷王を立つ懷王天曆と改元し皇帝の位を襲ひしも明かに天下に告るに攝位の意を以てし幾ほくもなくして使をしてその兄、周王和世球を漠北に立てしむ是を明宗皇帝と爲

す帝歸途暴かに崩じ弟懷王また木兒によりて更に位に即く是を文宗皇帝と爲す時に我か紀元千九百八十八年にあたれり

燕帖木兒及ひ伯顔の專恣

服色を定む

文宗帝の時西僧輩眞吃刺思寵を得て帝師と爲る朝臣等之を郊迎せり一日宴に於て大臣俯伏して觴を帝師に侑む帝師爲めに動きて禮せず其威實に甚しかりしが惟た國子祭酒李木魯神は觴を擧げ呼んで曰、帝師は釋伽の徒にて天下僧人の師なり余は孔子の徒にて天下儒人の師なりと遂に帝師に屈せざりき帝是より儒を尙ひ孔子の父叔梁紇を封じて啓聖王と爲し顔氏を啓聖夫人に顔子を袞國復聖公に曾子、子思、孟子等を加封し又學士儒人に命じて本朝の典故を輯せしめ經世大典と名けしむ時に湖南の范梈及ひ翰林學士吳澄死せり二子皆

通儒を以て著はる

是より先き燕帖木兒は定策の功ありしを以て帝の寵異益甚しく木兒を以て右丞相と爲し左丞相を置くことを罷めて政を専らにせしむ脱々木兒の徒其權勢の崇重を奏して誅せらる帝晩年上都に在りて崩す皇姪懿璘質班位に即く是を寧宗帝と爲す帝在位僅かに二月を経る崩す皇兄妥懽帖睦爾位に即く是を順皇帝と爲す時に我か紀元千九百九十三年なり

順皇帝の即位の初年にありて燕帖木兒死す燕帖木兒政を秉りしより以來肆行忌憚なく泰定帝の后を取りて夫人と爲し前後宗室の女に尙するもの四十餘人交禮數日にして遣歸さるるものあり又その女を立てて后と爲す一日平章政事趙世延か家に宴し座隅の一婦人の美麗なるを見て與に俱に歸らんと欲し左右を顧みて曰、此れ誰とかする左右の曰、大師の家人なりと自後荒淫日に甚しく身體羸困して死せり

燕帖木兒死して伯顔代はりて朝に立ち右丞相と爲り撒敦左丞相と爲る時に阿魯輝帖木兒と云ふものあり伯顔の意に阿り帝に謂つて曰、天下の事重く宜しく宰相に委して之を決すへ若し躬自ら聽斷せば必ず惡名を負はんと帝之に従ひ事皆宰相に任せり後ち撒敦死し伯顔獨り政を秉る燕帖木兒の子唐其勢と云ふもの忿りて曰、天下は我家の天下(燕帖木兒は武宗文宗等と立つ故に云)なり伯顔等の功を以て吾上に位すと遂に諸王晃火帖木兒を立てんとてその叔父答鄰答里と謀り兵を東郊に伏せ勇士を率ゐて官に突入す伯顔亦備を爲して唐其勢を捕獲して之を誅す其弟塔刺海走りて皇后の座下に匿る后蔽ふに衣を以てす左右曳き出して之を斬る血、后の衣に濺く伯顔帝に奏す並せて后を執へんと后、帝を呼びて曰、陛下我を救へと帝の曰汝の兄弟逆を爲す豈に之を救ふへけんと乃ち遷して官より出さむ伯顔之を開平の民舎に弑す晃火帖木兒自殺す

是の時廣東の朱光卿其党石昆山、鍾大明等と兵を擧げて反し大金國と稱す河南樺胡亦兵を擧げて反せり『帝國庫日に乏しきを以て御史臺の言により宦者の數を減し冗費を省き又服色器皿輿馬の制を定む時に服飾は上下ともに別無く帝初め民間の麒麟鸞鳳等を服するを禁したり』か是に至りて倡優の盛服及ひ笠を戴き馬に乗ることを禁せり『婺州の總管府金華の儒士金履祥か著はせる所の論孟の考證を刊行せしむるの門人東陽の許謙、之に序して曰、聖賢の心は盡とく四書にあり四書の義は朱子に備はるるの立言を顧みるに辭約にして意廣く讀むものろの粗を得てろの義を究むる能はず或は一偏の致を以て自ら異として初めより未だろの範圍を離れざるを知らず世の詆譽賢亂務めて新奇を爲すものろの弊まさるに此にあり此金先生考證の由りて作る所なり』許謙は金山の高弟にて履祥道を蘭江の上に講するを聞き己を委して學ぶ履祥嘗て之に告げて曰、吾儒の學、理は一にして

分は殊なり理は一ならざるを患へず難んする所は分の殊なるのみと謙是に由りて力をうの分の殊なるところに致しうの歸を理一に要す初め履祥謙に謂つて曰、士の學を爲すは五味の和にあるか如し醴鹽既に和すれば則ち酸鹹亦變ず子來りて我を見る三日猶依然たる人なり豈我學の子を感發する所なきかと謙之を聞きて惕然として後ち遂に大に發明して通儒を以て著はれしか是に至りて卒せり

脱々、伯顔を彈劾す

嶮嶮比于の圖を上る

伯顔既に唐其勢を誅して自ら大丞相と爲り獨り國鈞を秉り權を專にして自ら恣に一邵王徹、宣讓王帖木兒不花、威順王寬徹普化等の己れに反對せるものを貶黜して殺戮せしか伯顔養ひし所の弟の子に脱々と云ふものあり伯顔の姦惡を爲し天下を虐害し漸く異謀あるを見深

く之を憂ひうの父馬札兒台に謂つて曰、伯父驕縱已に甚し萬一天子震怒せば吾族、滅せられん未だ敗れざるに之を圖るに何れぞやと其父亦之を賛す脱々またうの師吳直方に質す直方の曰、傳に言へるあり大義親を滅すと子たご國に忠するを知らんのみ餘はまた何をか顧みんと一日帝に見え間に乘りて家を忘れ國に殉ふの意を陳す帝未だ之を信せず時の帝の左右は皆伯顔の党なり獨り世傑班何魯帝の腹心たり二人日に脱々と從游し忠義の言を以て相與に往復辯論して益、脱々の異心なきを知り遂に帝に聞す帝始めて脱々の忠を知り一日泣きて脱々に語る脱々も亦泣下り遂に世傑班等と謀りて伯顔の入朝するを候ひて之を擒にせんと欲す

一日伯顔出獵するに乗じて脱々等うの兵及び宿衛の士を以て伯顔を拒き京城門の鑰を拘り其夜帝を奉りて別殿に御せしめ楊禹等をして詔を草して伯顔が罪狀を數狀しめ黜けて河南の行省左丞相と爲す伯

顔途眞定を過く父老うの意を憐み觴酒を奉して進む伯顔の曰、汝か曹、子の父を殺す事を見るか、對へて曰未九子の父を殺すを見ざるも惟た臣の君を弑するあるを聞くと伯顔俛首慚色あり已にして帝うの罪の太重く許すへからざるを以て南の方恩州陽春縣に安置せしむ途上病んで卒す

伯顔死し脱々右丞相と爲り軍國の重事を司どる脱々幼にして其父馬札兒台うの師吳直方に請ひて言ふ兒をして終日書を讀ましむるは日に嘉言善行を記して終身之を服せしむるに如かすと是に至りて悉く伯顔か行へる所を更め科擧を復して士を取り（伯顔相たる時科擧と鹽額を減し負、逋を蠲き經筵を開く中外賢相と爲す）

是時奎章閣の學士曠經筵に侍す帝古名畫を觀んと欲せしかは曠は郭忠恕か比干の圖を取りて進めて言ふ昔紂は比干か諫を聽かすして遂にうの國を失へりと帝又宋の徽宗の畫を閱して善と稱す曠は進んで

曰、徽宗多能なれとも一事能はざるありと帝問ふて曰何うと、對へて曰、獨り君たること能はざるのみうの身辱められ國破らるゝは皆君たる能はざるの致す所なり凡う人主は君たるを貴ふべきのみ他は貴ふべき所にあらずと、時に勅撰の遼金宋の三史成る、吳師直の子萊深經義に通し著述を以て務と爲す嘗て云ふ文を作るは兵を用ふるか如し兵に正あり奇あり正とは法度なり奇とは法度の爲めに縛せられず千變萬化坐作擊刺一時に俱に起るうの止めんと欲するに及ひて部伍各うの隊に還りてもと曾て亂れすと聞くもの之に服す、又朱公遷、揭傒斯虞集楊載等經學文章を以て著はる其他稗史小説戯曲の書も續く著述せり後世小説家重する所の水滸傳も亦當時の著にかくと云ふ

諸州亂民作る

順帝の荒淫

汝頴(漢定帝)の劉福通亂を作し紅巾を以て號と爲す後ち宋と稱し勢太
 九猖獗なり斬州の徐壽輝等其他蕭縣の李二及ひ貴州廣西の苗族等の
 亂民も亦四方に蜂起せり」是より先き黃河大に決して南に徙るるの
 修繕の議論朝廷にて決せざりしか脱く等は漕運使賈魯の議に従ひ
 河南河北の兵民十七萬を發し禹の古道を整り求め五月を以て功を終
 へ河、故道に復せり」而れども是より汝頴の兵起り天下次第に亂れし
 を以て議者或は云ふ天下の亂は賈魯か治河の役に民を勞し衆を動か
 すの致す所なりと而して議者は元末の亂兆は由來する所遠く朝夕の
 間にあらざるを知りて賈魯の議を寃とせり」脱々出でて徐州を征し
 又賈魯に命じて濠州の賊を討せしむ」時に泰州の民張士誠と云ふも
 の財を輕んじ施を爲し衆民を聚合して泰州及ひ高郵等を陥れ之に據
 りて大周と僭號し自ら誠王と稱し遠近の士民を煽動せり
 時に帝、位に在る久しきを以て政事に怠り遊宴に荒れり西僧等之に

乘し房中運氣の術(一に破操兒と云ふ漢書)其他秘密の法等を帝に傳授し
 て愈帝の心を迷惑せり帝又宮女十有六人を以て舞蹈せしめ名つけ
 て天魔舞と云ふるの舞容は首に髮數辮を垂れ象牙の佛冠を戴き身に
 瓔珞大紅銷金及ひ長短の裙襖其他錦繡の衣又窄衫唐帽等の異類異服
 を着けしむ奏する所の樂には龍笛、小鼓、琵琶、笙、胡琴、響板等を用ひ
 宮中佛を讚し經を誦する毎に此の舞樂を用ひたり是の時脱々罷黜せ
 られて哈麻右丞相と爲り妹婿秃魯帖木兒等と事を用ひ西僧伽璘眞を
 國師と爲し良家の女數人を取りて之に奉し名けて供養と云ふ嘗て帝
 を給きて曰、陛下は尊富なるも現世を保有するに過ぎざるのみ人生
 幾時うまさ此の秘密大喜樂の禪定を受くべしと是に至り廣く女子
 を娶りて淫戲せしめ男女裸處せりうの室を號して豈即兀該と云ふ豈
 即兀該とは漢言の事に碍する無しと云ふか如し群僧禁中に出入し濫
 行甚たしきこと言ふに勝ふべからず此の時樂城の人白蓮會を以て香

を焼きて衆を惑はす倡言すらく天下大に亂れて彌勒佛下生して中國の主と爲ると河江の民大に之を信し後ち劉福通等之に因りて反すと云ふ

帝又内苑に於て龍船を造る長さ百二十尺廣さ二十尺、上に五殿あり皆五采の金装を施し日に後宮なる海子の内に遊戯す船行くときは龍の首眼爪耳皆動く又自ら宮漏を制す其費亦巨萬を費す哈麻日に威權を恣にし詔を矯りて脱々を淮安に酖殺し其他已れに逆ふものをは斬戮至らざるなくろの弟雪くを御史大夫となし國家の大政遂に兄弟の掌握中にあり

明主朱元璋の興起

元室の滅亡

哈麻さきに西僧を進め天下士大夫の笑辱する所と爲るを耻と爲し帝

を太上皇と爲し太子に位に即かめんと欲し其父秃魯に告ぐ時に妹夫秃魯帖木兒専ら淫褻を以て帝に媚ひしを以て太子帝たらは已れ先づ誅せられんことを恐れて帝に聞す帝大に怒り哈麻雪くの兄弟を誅殺し後ち搠思監、太平及び宦者朴不花等の小人に任し朝政大に紊亂せり

外には諸豪賊大に之に乗し兵を起し争亂絶えずの重なるもの徐壽輝は斬水に據りしは是に至り國號を天完といひ帝と稱し劉福通は亳州に據りて國號を宋といひ韓林兒を立てて帝と稱し陳友諒は武昌に據り國號を漢といひ帝と稱し明玉珍は成都に據り國號を夏といひ帝と稱せり又陽翟王と云ふもの自ら太宗の苗裔と稱し阿輝帖木兒等と兵數十萬を擁して京畿を犯し來り帝に言はしめて曰、祖宗汝に付するに天下を以てせしに汝已にろの太半を失せりも國璽を以て我に付せば余自ら之を爲すべしと帝秃魯帖木兒を遣はして之を撃たしむ

克たすして皆潰へ禿堅帖木兒は上都に走れり
 時已に朱元璋と云ふもの兵を起し和陽より江を渡りて太平路を取れり是を明の太祖と爲す元璋は泗州の人にて權略あり家貧なるを以て僧と爲りしが天下の亂れたるに及び遂に郭子興の部下に屬し後ち辭して自ら兵を集めて定遠滁州の地を畧し是に至り江を渡りうの勢大に江東に振へり後ち劉基宋濂、徐達常遇春等の文學智勇の士を得て遂に都を江寧に定め國を吳と稱し宋、漢、夏、諸僭國を平け破竹の勢を以て元の都、燕京に迫れり』時に元室は宦者朴不花右丞相搠思監の驕専不法を以て内亂絶にさりしかは帝、元兵の日に迫るか爲めに后妃太子を集めて兵を避けんことを議し夜半建德門を開き居庸關を出て北に去り上都應昌府に駐り幾ばくならずして崩せり明兵應昌を襲ひ皇孫質的里八剌及び皇妃寶玉皆捕獲せられ太子愛鄭識理達臘數十騎を從へて遁れ去り其子孫殘喘を漠北に保ちたり』元朝の版圖は

太祖世祖等の時には殆ど東半球を領したりしか數世を歴て次第に減削し順帝の時にはうの領する所支那本部長城以外の蒙古地方の一部に過ぎざりしが此に至りて全く明室に與へたり元は世祖より順帝に至るまで凡う十世八十九年にして亡ふ我か紀元二千零二十八年後龜山帝正平廿三年にあたりし時已に朱元璋都を金陵に定めて帝位に即き國を明と號し洪武と改元せり是を太祖皇帝と爲す

明

太祖の統一

及びその政略

太祖皇帝朱元璋の先は沛江蘇沛縣人にて江東の句容江蘇句容縣に徙り中世淮淮水は鳳陽に徙り泗州府に家す帝の父に及びて鍾離鳳陽に徙る帝幼にして泗洲大に疫し父母兄弟死し倚るなきを以て皇覺寺の僧と爲り寺また食乏しきを以て江淮の間に遊食すること數年なりしか是

時汝(河南汝州府)穎(河南颍川府)の兵起り濠州を騷動す定遠(安徽定遠縣)の郭子興濠州に據る元將徹里不花憚りて進まず日に民物を掠奪せり帝遂に之に歸し其寵を得て其女を娶る後ち郷に遷り民兵七百人を得たり是より威名日に著はれ豪傑景の如く従ひ徐達、湯和、其他馮國用兄弟來歸せり

帝既に滁州に克ち郭子興を滁陽と爲す時に懷遠の人常遇春、定遠の人李善長、來歸し軍勢大に振ふ後ち郭子興卒し其の兵を併統一東に渡り太平路を取る又金陵を破り自ら城に入り諭して曰、賢人君子能く相従うて功業を立つるものあらば吾禮して之を用ひん舊政不便のものあらば吾汝か爲めに除かんと諸州の士民皆風を聞きて來歸し寧越、浙東を平定し青田(處州青田縣)の劉基、龍泉(處州龍泉縣)の章溢、麗水(處州麗水縣)の葉深及び浦江の(金華浦江府)宋濂其他胡大海、王禕、許元、王天錫等十數の諸將を得て帷幄の臣と爲し湖廣(陳友諒)、浙西(楊士誠)等を平け遂に甲十二

十五萬を率ゐて北伐して中原を定め南の方八閩を取り海に航して廣東に赴かしめ楊璟をして荆湖諸州の兵を以て廣西を取らしめ又自ら金陵に入り檄を馳せて齊魯河洛燕薊秦晋を諭するの略に曰、宋祚傾移して元、北狄を以て入りて中國に主たり幾ばぐならずして元の臣子祖訓に遵はず綱常を廢壞し後嗣に及ひて沈荒して君臣の道を失ふ又加ふるに宰相權を專にし有司毒虐するを以て人心離叛し天下兵起る人事の致す所といへども實に天の徳を厭ひて之を弃つるの時なり予も淮右の布衣天下の亂に因りて衆の爲めに推され師を率ゐて江を渡り金陵形勢の地に居り我中原の民久しく主とする所なきを視て深く心を疚ましむ我兵至るも民人避くるなかれ我向ふ所は士民を塗炭に救ふなれば秋毫も犯すことなると又劉基をして律令を定めしめ内治を釐正し後ち數歳を歴て方國珍に浙東に克ち邵武建陽等を降し福州を取り後ち又徐達をして直ちに元都を取らし

め又元の遺臣擴廓帖木兒等を討ち走らし夏、宋、漢等の割據國亦平定せり是より先き帝已に九五の位を踐み大明と號し都を金陵に建て之を南京應天府と爲し宋の故都汴梁を以て北京開封府と稱し元の燕京を北平府と爲し燕山等の八衛を置き諸將を置きて之を守らしめたり帝准右に興起せしより即位に至るまで殆ど十餘年にして天下始めて一統に歸せり

帝位に即き郊社宗廟の禮を定め服色を易し禮樂を制し祖稅を軽く吏治を重くす其天下を制御するに重なる者は名城大都を擇ひて宗室諸子を封し外は邊陲を守り内は王室の藩屏と爲さんとして拔を秦王(西漢上)に制を燕王(北平上)に檣を晋王(太原上)に植を楚王(武昌上)に梓を澶王(鄴州上)植を遼王(遼東上)に其の餘尙ほ數十人を封したり然れども弊の生ずる所以を慮り已に諸王子を各地に封建すと雖ども皆給を政府より命せし所の縣官に仰かしめて兵食の權を委せしめざりき

燕、晋二王の如き邊境守禦の任に當り隱然勢力を有し他日の禍因を爲しとは例外の事と謂ふべし又前代外戚を寵用してその弊を生せしに鑑み后妃宮妃は凡て民間の秀女を選出し人君節儉の治を佐けしむるも肯て政權に參與せしめざりき

又宦官の禍に至りては最も意を致し嘗て鐵牌を鑄りて宮門に置きて曰、内臣は政事に干預するを得ず預かるものは斬らんと又内官の書を讀み字を識るを禁し諸司のもとに文書往來を許さず定制して外臣文武の官を兼ねるを得ず外臣の冠服を着くるを得ざらしめしか如きは内官の禍災に意を致ししものと謂つべし又刑部尙書劉惟謙等に命して大明律を詳定せしむるの篇目唐に準し黥刺趾割割の刑を禁し舊律を損益して六百有六條と爲し元末寬縱の弊を矯めんとして刑罰を嚴施せり又功臣の廟を江寧府治の東北に建て徐達、常遇春、李文忠等の死者の肖像を配祀し又郡縣に詔して學校を立て教化を尙

ひ及び天下に詔して遺書を求めしめ又古の忠臣孝子及び身經歷する所の艱難戦伐の状を圖して子孫に示す又士を取るに科擧の法を以てして郷試會試殿試等の別を設けり其他兵制を一定し京師より地方に至るまで衛所を設く一衛の人數大凡う五千六百人、その細別には八千戸所、百戸所あり百戸所は人數百十二人にして千戸所はその十倍なりとす平時は指揮使をしてその衆を掌らしめ事あれば總兵管に詔し將印を佩ひて之を督し征伐に従はしめ征伐終はればその將印を朝廷に還さしむ

帝又朱升に命じて女誠を修めしめ且つ之に謂て曰、天下を治むるものは身を修むるを本とし家を正すを先とす后妃は天下に母儀たりといふとも政事に與らしむべからず政、内より出て禍の本たらざるものは未だ之れ有らざるなりと又大本堂を建て儒臣をして太子諸王を教授せしむ嘗て文樓に至り太子に問ひて曰、近ごろ儒臣何の史

を講するかと曰、漢の七國の事なりと帝曲直安にかあると問ふ對て曰、曲七國にありと帝の曰、此れ講官一偏の説なり景帝太子たりし時より傅局を以て吳の世子を殺す帝と爲るに及びて輕く量錯に聽いて諸侯を剗削す七國の變は實に此に由る若し諸子の爲めに此を講せばまさに藩王たるもの上は天子を尊み天下の公法を撓ますなかれと言ふべし然るときは太子たるものは親を親むるの恩を隆にすることを知り諸子たるものは王室を夾輔して忠臣の義を盡すことを知らんと帝又致仕官の郷に居る禮を定むるの制族内は尊卑を序しその外祖家及び妻家も亦尊卑を序し筵宴の若きは別席を設けて官なきものゝ次に座することを許さすも異姓の致仕官と會すれば則ち爵を序す爵同一ければ齒を序するの異姓無官のものと相見ゆるには答禮を須ひす庶民官禮を以て謁見するとき凌侮するものあれば論するに律を以てせり帝の施政言行此の如きを以て明朝二百七十六年の基

礎を立てしこと亦宜なりと謂つし

定遠の役 周敬心の上疏

帝即位後二十一年にあたりて雲南、平緬の蠻叛き衆三十萬戰象百餘を擧げて定遠に寇す勢甚肆なり西平侯沐英自ら精銳二萬を將お往きて之を討ち令を軍中に下し火銃神機箭を置いて三行と爲し陣中に列す將士鼓勇して進む敵人衆を悉くし百象を驅りて來り戰ふ象皆甲を披き背に戰樓を負ふ狀欄楯の如し竹筒を兩旁に懸け短槊をうの中に置きて擊刺に備へ陣既に交はるとき火箭銃砲連發し聲山谷に震ふ象皆驚き奔る敵中に昔刺と云ふ者あり亦驍勇なり殊死して戰ふ英戰を督する益急なり三軍大呼していふ聲にするを時を移さすと敵衆大に敗る斬首三萬餘級四十七象を生獲す餘は皆矢を被る蝟の如くにして死す渠帥刀斯郎、理各百餘矢に中り象背の上り斃る是を定遠の

役といふ是より諸蠻蠻服し平緬歳に貢賦を入れ復た反せざりき是時また征虜大將軍藍玉、副將軍郭英等北征し大寧より進んで慶州に至り直ちに元の營を搗くうの大尉蠻子拒戦し衆五萬餘人を墜にす元主脱古思帖木兒、數十騎を以て遁れ去る玉追ひて及はすうの王子及び後宮、后妃衆四萬餘人を獲て師を旋す元主部下の爲めに弑せられうの部屬皆奔散し元裔日に微なり玉等京に還り捷を獻す帝大に喜ひ玉を涼國に封す幾はくもなくして沐英病を以て卒す英沈毅賢を好み士を禮するの府にある百務具さに擧る帝嘗て曰、吾をして枕を高くして南顧の憂なからしめしは英の功なりと黔寧王に追封せられうの子晟、昂、相繼きて雲南を鎮せり帝初め元裔の漠北にあるものを征せんとい諸將に謂つて曰、今天下一家になりしも尙ほ三事の未た了せざるあり一は歴代の傳國璽、元において未た獲す二は統兵王保（曾、元の遺將）未た擒にせず三は元の太子

の音問を聞かずとは是に至りて山東の監生周敬心上疏して曰、國祚の修短は徳の厚薄にあり曆數の定むべきにあらす陛下但まことに徳を脩むへ陛下連年遠征あるは萬口一辭に皆その傳國の寶を得ざるを耻ぢて之を取らんと欲することなるを知る蓋し傳國の寶は戰國より出づ楚の平王の時、卞和得る所の玉を以て琢せしものなり秦の始皇之を秘し名けて御璽といふ是より以來歷代之を珍とす故に此の名あり易に曰、聖人の大寶を位といふ何を以て位を守る仁といふと仁は人君の寶にして玉璽は寶にあらざるなり且、戰國の君趙先づ寶を得て國守らす五代の君皆寶を得たるも皆踵を旋へさずして亡びしは玉璽の寶たるを知りて仁義の寶たるを知らざりしか故なり天下治安國を享くること久しきものは三代に如くはなれ三代の時未だ玉璽あらす故に天下を有つものは仁義にありて璽にあらざること明かなり今寶を取るか爲めに兵革を動かす民を困むるは是れ真正の大寶を忽に

して無用の小寶に易ふなりと帝頗るその言を納れ是よりまた北伐せざりきといふ」當時葉居昇もまた三事を上言して曰、封を分つこと太た侈り、刑を用ふること太た繁く、治を求むること太た速かなりと其一に曰、秦晉、燕、齊、の諸國都城宮室天子に亞ぐ恐らくは尾大にして掉はず變不測に生せんと帝崩せし後ち藩王驕横なり燕王棣の如きは燕、周、齊、湘、等の諸王を煽動して靖難の兵起りしは實にその言の誤らざるものと謂つべきなり

胡藍の獄

我日本及朝鮮との關係

帝の在位の中において前後有名の胡惟庸及び藍玉の二大疑獄起れり帝初め楊憲胡相とせんとして劉基に問ふ基は憲と相善かりしも不可として曰、憲は相才あるも相器なし宰相は心を持する水の如くに義理を以て權衡と爲し己れ與からざるものなり今憲は然らずと又胡

惟庸に及ふ基の曰、此れ小憤の如きのみまことに轅を戻して犁を破らんとすと甚たうの人物の非なるを論ずされと帝遂に胡惟庸を用ひしかは基大に感ひて言ふ吾か言をして過あらさらしめは蒼生の福なり果して過あらはうれ蒼生を如何せんと遂に憂憤して疾を成す基嘗て帝の爲めに甌閩の事を陳へて曰、甌閩の間に隙地あり淡洋と云ふの南閩海に至るを三魁と爲す賊盜の藪たりうの地に於て巡檢司を置き之を制すへいと其子隆をして之を奏せしむ胡惟庸是に至りて刑部尙書吳雲をして劾せしめて曰、基は淡洋の山海に踞り險要にして王氣あるを以て己れか墓地と爲さんと欲し司を建つるの策を立てうの人を窘しめ變を激せしむと疏入るに及んで惟庸、基父子に重辟を加へんとせり基馳せて朝に至り辨す惟庸、帝の基を寵するの念怠ると信し陽に基と相善きものゝ如くにして醫を遣はし其疾の視せ藥を與へしむ基之を服し遂に其郷青里に卒す基帝を輔けて中原を平定

し尤も籌策に富む帝嘗て子房を以て之に況ふ『基死し惟庸専ら中書の政を總へ威福を恣にし己れを病むものは之を黜く是によりて奔競の輩大抵うの門下に趨く惟庸遂に邪謀を懷くうの家人奸惡を爲し吏を榜辱せしか爲め吏怒り庸の邪謀を訴ふ帝怒り家人を殺し且つ惟庸を詰る惟庸知らすと謝す帝またもとの誠意伯劉基の死狀を究責せしかは惟庸うの罪の見はれんことを懼れ陸仲亨、費聚等の不平の徒數十人を脅誘し私かに事を謀り指揮使林賢をして海に航して倭軍を招かしめ又人をして元の子孫に臣を稱し兵を請ひ外應を爲さしめんとせり幾ばくならずして日本の貢使來り和かに惟庸に見はるかば惟庸約するに精兵千人を載せ偽りて貢者のまねし帝に見えは期に及んで府中の力士を會し掩ひて帝を執へん若し不可ならは庫物を掠めて海に泛へと倭軍云々及び貢使のこゝ國朝獻册録及び海國編に據る然れ後ち數日を歴て帝に詭り言ふ第中の井に醴泉を出す願くば臨幸あれ

と翌日帝西華門を出つ内使雲奇と云ふ者蹕道を衝き馬銜を勤く惟庸の姦謀を言はんとせしも意氣激昂く口舌濫滞して意を達する能はず左右拳捶亂下し右臂折れんとす雲奇なほ惟庸の第を指し痛の爲めに屈せざりしかは帝始めて悟り城に登り惟庸の第を望めば兵を複壁の間に藏し刀架林の如くに立てり帝怒り兵を發して掩捕考掠し狀を具して市に磔し其党御史大夫陳寧中及中丞余節等皆誅に伏し党與僚屬株連株は誅にて本根と誅すれば枝葉悉落つるが如く累及するを云ふせらるるもの一萬五千餘人に及ぶ李善長、陸仲享、宋濂等其謀に與れりと殆ど誅せられんとせしも皆創業の功臣を以て貶黜に止まれり後ち李善自ら縊れて死し宋濂疾を以て死せり宋濂は太子に侍せしと十餘年文章學術を以て著はるその孫慎の惟庸に党せしを以て是に至りて上の怒に觸り誅せられとせしか皇后帝を諫めしを以てその意漸く解け茂州に安置せられて死せり虞部郎王國用は李善長の冤を訴ふるの言甚だ切なり而るに帝愈々惟庸

の党を惡み刑部に命じて殘党を肅清するを以て天下に播告し又丞相惟庸か故を以て詔して曰、古より三公道を論し六卿職を分つも丞相を設立するを聞かず秦より始めて丞相を置き踵を旋さすして亡べり漢唐宋は賢相あるも然かもその中の小人多くして權を専らにして政を亂せり今丞相を罷めんとて五部六部等の衙門を設け天下の庶務を分理して彼此專擅するなかりむ而して事皆朝廷之を總へり時に洪武十三年にて我か紀元二千零四十年後龜山帝の天授六年にあたり後ち十數年を歴て涼國侯藍玉不軌を謀り誅に伏せり藍玉は常遇春の妻弟にて人と爲り偉大にして勇略あり常に春の麾下に屬し戰功を立つ後また雲南及、元の遺裔を討し西蕃罕東の地まで畧し帝之を衛青李靖に比して寵異せしか惟庸の時にあたりて人その謀に與かると稱せしも帝その功大なるを以て問はざりき後ち諸老將多くは没せしを以て擢てられて大將と爲り兵を總へ征伐して甚帝意に稱へり嘗

て陝西の邊事を措置し蘭川に至り馬より墜ちて微傷を被る帝詔して之を慰勞せしむ玉素より不學性亦狼愎帝の己れを待つ厚きを見又自ら功伐を恃み專恣横暴壯子假子數千人を畜へ出入勢に乗じて漁獵せしむ是より先き北征して還り喜峰關を渡る吏夜を以て納れさりしかは玉怒り兵を縦ち關を毀ちて過く帝聞きて樂まするの嘗て元主の妃に私せしを詰責せしも玉愼然省みするの兵を總へ外にあるに及んては擅に降將を陞し軍士を黥し甚しきは詔に違ひ師を出たし恣に威福を作し其下を督制するに至る是に至り陝西征伐の功を以て爵を進めんとを望む帝命して太傅と爲さしめんとす玉袂を攘ひて曰我もと太師たるへからざらんと意甚た怨む後ち事を奏するに及んて帝從はさりしかは玉懼れ退いて所親に語りて曰帝我を疑へりどうの嘗て己れの部將たりし張翼、陳桓、曹震、朱壽、何榮、黃恪、等數十人を召し長夜私宅に會し謀議して變を爲さんとせしか錦衣衛指揮

將獻の爲めに告げられて市に磔せらるる列侯功臣文武の大吏より偏裨將卒に至るまで連座して死を論せらるる者二萬餘人その數惟庸の獄よりも過く國初の功臣胡藍二党に座して夷滅殆ど盡く時に洪武二十六年にて我が紀元二千零五十三年後小松帝明德四年なり是より先き寧海の方孝孺を徵し至らしめて曰是れ異人なり吾用ふる能はず留めて子孫の輔佐とせんと漢中の教授に除せり燕王棣初め師を帥る邊を巡りしか元の兵を徹々兒山に敗り是に至りてまた之を兀夏哈禿城に追敗してその土燕に還れり初め我が邊民元末より屢し高麗の邊疆を犯ししか帝の時に至り明の沿岸に及ひ術江及び雷州等に寇せしを以て帝は防倭衛所を設け我が邊民を防ぎ且つ使を遣はしてその侵寇を禁せんと請へり帝嘗て漢唐藩王の善惡を採り昭鑑録と名け又歷代奸臣の跡を編して辨姦錄と稱し諸王子に與へ又祖訓十三條を著はして頒布せりその中に云ふ日本は海を隔て一隅に僻在

すうの地を得るも供給するに足らず其民を得るも使令すへからず故に兵を出たし伐たさらんことを訓章してうの往來を絶たしむと然るに我邊民後益々浙江等を擾亂する甚かりしを以て明人之を倭寇と稱しうの鎮撫に苦みたりき高麗は是より先き明室に入貢せしか恭愍王薨し内亂絶さりしか大將李成桂民心を收攬し國事を主とり使を遣はし國號を更めんと請ひしかは帝古號に仍りて朝鮮と稱せしむ今日朝鮮王の太祖是れなり帝在位三十一年にして崩す洪武と改元す帝英邁果斷諸政を改革し儒術を重んじ尤も力を諸王封建のこと及び、内官外戚の關係を嚴にするに致し吏治を崇ひ法を以て前後二獄に於て功臣を誅除せしが爲め其威力大に行はれたりといへとも燕大王の兵を擧ぐるに及ひて能く拒くものなかりしはうの餘響と謂つへし皇犬孫允炆立つ是を建文皇帝といふ時に我が紀元二千零五十九年後小松帝應永六年にあたり

靖難の禍

方孝孺鐵鉉の忠烈

建文帝位に即き先帝の遺命に従ひ漢中の教授方孝孺を召して侍講と爲し文淵閣に直せしめ齊泰、黃子澄等を用ひて國事に參せしめ又方孝孺か議により内外の品官階勳悉く周禮に倣ひて更定し又禮制を撰み天下に頒行すされど實事を濟ふなきを以て諸王の意を激したり諸王帝の即位せしを聞き叔父の尊に憑り不遜甚し黃子澄、齊泰、澄漢等之を患ひ漢の七國を削平せし事を進めしかは帝之に従ひ遂に周王を廢し代王を幽し岷王、齊等を庶人とし齊王、湘王等は逆謀を以て誅に伏し諸王危懼して心を安んずるものなし是に於て燕王棣の國都北平府に據り兵を擧げて反し且つ上書して曰、高皇帝百戰に艱難して天下を有し之を萬世に傳へんと期せり然るに奸臣齊泰、黃子澄が輩陛下の威權を假り王家の枝葉を剪り數月の中に五王を削る臣藩を燕

に守り法を遵奉せしに臣不軌を謀ると迫り言へり奸臣の心恐らくは臣を害するのみならずらんとを譬へは大樹を伐るには其枝を剪るか如く親藩夷滅せば社稷安からんやと其兵を靖難と號し周公の成王を輔けし故事に效ひ齊泰黃子澄を誅し君側を肅清するを名とし寧王權の護衛諸戍を合せ張玉朱能等をして師を出さしむ其勢甚だ盛なり』帝齊泰黃子澄を罷めて燕王に謝せしむ然れども陰かに京師に留めて密議に參せしむ燕王之を聞き帝の帥李景隆耿炳文等と德州に戦ふ兩軍矢石雨の如く下る燕王三たひ馬を易へ三たひ創を被る會ま旋風來りて官軍の旗を折く官兵大に亂る燕王勇を鼓し風に乘りて火を縦つ官兵死するもの數十萬燕軍城に入り糧儲百餘萬石を得て勢益々張る李景隆濟南に據りまた敗る帝之を召しかへす』山東の參政鐵鉉と云ふもの之に代りうの都督盛庸と死を誓ひ且つ高皇帝の神牌を書し城上に懸けて守る燕兵城を圍むも進まず鉉等夜に乗じて燕兵を掩撃

れて大に敗り德州を復せり

時に帝詔を諸將に下して言ふ朕をして叔父を殺すの名あらしむることなかれと燕王之を聞き戦利あらざるときは自ら身を挺て前み諸軍を督せり盛庸保定を保ち燕軍の爲めに敗らる燕兵進んで大名に次す帝盛庸の敗を聞き懼れて齊泰、黃子澄を外に竄せり』燕王之を聞き盛庸吳傑か兵を罷めんと請ふ帝之を孝孺に問ふ孝孺か曰、燕兵久しく大名に頓す其心己に怠れり今爲めに其請を許し之をして備を釋かしめ諸將に命じて北平を攻めしめ大兵之に繼かは擒にすべしと帝うの言に従ひ燕王をして兵を罷めて藩に歸らしめんとせしか燕王聽かず進んで彰德を掠め林縣を陥れ遂に兵を勅して地平に還り復た大舉して南下せんとせり

是より先き帝中宮を御すること其嚴なりしを以て皆怨望せしか是に至り燕王に告ぐるに京師空虚取るべきの狀を以てせしかは燕王大に

喜ひ大舉して南下し山東の州郡を陥る帝魏國公徐輝祖都督何福等に命じて燕兵を山東に禦かむ官軍頻りに燕兵を敗りし帝燕兵已に北走すと云ふ訛言を信じて輝祖を召し還さしむ福か軍遂に孤なりしかは燕兵何福の軍を靈壁に破り又淮河に於て盛庸か軍を走らし淮を渡り揚州を陥れ遂に江を渡り進んで京師に逼る孝孺曰事急なり地を割き和を求めて四方勤王の師を待つに如くはなしと帝の言に従ひ和を請ひしも燕王聽かず遂に京師を犯す群臣皆勸めて浙に行かむ惟た孝孺は力めて金陵を守り社稷に死なんことを主とせしか各王穗李景隆等門を開き燕軍を迎へ入る獨り衡府紀善周是脩等數十人之に死す時に建文四年壬午にあるを以て壬午殉難と稱す須臾に宮中火起る初め太祖位を帝に傳へしときろの終を克くせざるを知り一匣を授けて曰事急ならは之を啓くへしと是に至りて之を啓けは度牒并に披剃の具あり帝因りて髮を削り服を變へ御溝より遁

去り茅を白雲山寺に結び壽を以て終ふ在位殆ど四年なりき然るに京師傳言す帝崩すと燕王宮に入り后屍火中に在るを誤認し帝の屍と信じて葬るに天子の禮を以てせしも廟謚を設けず世稱して建文皇帝と稱す後ち恭閔惠皇帝と追謚せり燕王自立して位に即く是を成祖文皇帝と爲す時に我が紀元二千零六十二年後小松帝應永九年なり
帝即位の初め魏國公徐輝祖が爵を削る輝祖は燕師の江を渡りしを見て猶兵を引きて力戦せしが京師陥り諸臣燕王を迎附して勸進せし時も獨り屈せず是に至り爵を削り私第に幽せらる初め燕王の兵を擧ぐるや其謀主僧の道衍謂て曰南に方孝孺と云ふものあり學問氣慨あり武成るの日必ず降附せざらん請ふ之を殺すなかれ若し殺さば天下學問の種子絶はんと王之を首肯す是に至り執へられて至る帝召諭再三に及びしも孝孺屈せず既にして即位の詔を頒たんと議するに會ひ帝左右に誰か代り草すべきものと問ふ左右皆孝孺を擧ぐ因

りて命じて獄より出す孝孺衰経して見れば悲號の聲殿陛に徹す帝榻を降り慰諭して曰、先生勞苦することなかれ吾は周公か成王を輔けに法るのみと孝孺が曰、既に周公が成王を輔けしを稱するも今成王何に在るや帝の曰、渠れ既に自ら焚死せり孝孺が曰、成王存せされは何ぞ成王の子を立てせると帝の曰、國は長君に頼ると孝孺の曰、何ぞ成王の弟を立てざる帝の曰、これ朕が家事先生何ぞ自ら苦めるやと授くるに紙筆を以てして曰、天下に詔せんとす先生にあらざれば草するに不可なり請ふ我が爲めに詔命を作れと孝孺筆を地に擲ち哭し且罵る帝之を強ふ遂に燕賊篡位の四大字を特書し罵りて曰、死さば則ち死せ詔は草すべからずと帝大に怒りて曰、汝焉ぞ能く遠かに死なん朕まさか汝が九族を滅すべしと孝孺尙罵りて止まず帝命じて舌を割かむ孝孺血を含み帝座を犯し語愈々不遜を極む帝復た獄に繋ぎし宗支を捕擲抄夷するもの八百四十七人に至る又その

先人の墓を焚夷し且つ人を抄提する毎に孝孺に示さむ孝孺従はず乃ち母族妾族其他、知己門生等を誅夷して然る後孝孺を聚賓門の外に磔し刀を以て口の兩旁を抉り耳に至る凡七日罵聲死に至りて絶えずの絶命の詞に云ふ天降亂離兮孰知其由、奸臣得計兮謀國用猶、忠臣發憤兮血淚交流、以此殉此兮又何求、嗚呼哀哉庶不我尤と時に年四十六其妻鄭氏諸子と皆先づ縊死せり兵部尙書鐵鉉また執へられて至り廷中に背立して帝に見えず帝の肉を煮き口に納れ之を喰はしめ問ひて曰、甘きや否と鉉、聲を厲まして曰、忠臣孝子の肉何う甘からざらんと喃喃罵りて寸磔せらる帝乃ち大鑊に油數斛を納れ其屍を熬らしめ其屍の煤炭と爲りし者をして導いて帝に謁せしめんとせしか屍展轉して外に向ふ帝大に怒り内侍をして鐵棒十餘をして之を夾持して已れに面せしめ笑ひて曰、汝今始めて我に朝するかと語未だ畢らざるに油沸騰して内侍皆糜爛し

て棒を棄てて走る屍仍ほ背くこと舊の如く帝大に驚き命じて之を葬らむ時に年三十七孝孺、鐵鉉の外練子寧、卓敬等數十の忠臣義士亦慷慨死に就けり

安南及び韃靼の征伐

會通河の開浚

帝は建文の殘党誅滅の後には専ら建文帝の施設に反し高皇帝の遺制を奉り周齊代岷等諸王の爵を復し官制を舊に復し北平府を改めて順天府と爲し北京を置き都を此に定め流罪以下の徒を發し北京の田を開墾し直隸蘇州等の十郡浙江等九省の富民を此に徙らしめ被兵の州縣及び其他諸州の租庸を減免し或は翰林學士胡黃等に命じて四書五經及び宋儒性理の諸書を修せしめて海内の學校に頒布す後世之を永樂大全と稱して貴重せり此の如く篡立の後には刑罰を以て人民を震懾せ

しか如きとなきにあらずりも政に務め邪を去り恰も別人となりしか如きを以て史氏以て逆取順守の人と云へるは亦誣ひざるなり初め安南主陳日焜の臣黎季犛と云ふ者うの主父子を弑し篡立して之をうの子蒼に傳へたりしか帝の踐祚の時に及びて蒼、使を以て朝貢せしめ安南王嗣絶にて自ら衆の爲め推さると詭り封爵を請ふ帝うの言を信し之を允す後ち日焜の孫陳天平と云ふもの來奔してうの實を懇へしかは帝黃中、呂毅等を遣はし天平を安南に納れしむ蒼兵を伏せ遂に天平を劫殺せり是に於て帝大に怒り朱能、張輔等に命じて安南を討伐せしめ遂に黎季犛及びひうの子を捕へて京師に檻送せしむ後ち安南を改めて交趾と爲し十七府を置き尙書黃福を以て之を領せしめたり時に我が紀元二千零七十四年の頃なりき

帝已に南方安南を平定せしも北方には尙ほ元の順帝の遺族陸梁跋扈して明朝に従はざりき蓋し元の系統は明の太祖の統一と共に亡滅

せしと誤信するものあれどもさにあらず(四史傳する所の帖木兒ハ)順帝の遺族は蒙古に據り歷くとして相續きしか坤特穆爾の時に至りて鬼力赤と云ふもの篡立して可汗と稱し國を鞏鞏と號せり然るにその臣阿魯台と云ふもの鬼力赤を殺して元の遺族本雅失里を迎立して可汗と爲し明の使者郭驥を弑し其正朔を奉せざりしかは帝大に怒り親征して臘河より追撃して幹難河に至り本雅失里、阿魯台の軍を破りて後ち師を引きて北京に還れり

時に蒙古の部落瓦剌の勢漸く強く其酋馬哈木、本雅失里を殺しその族答里巴を立て可汗と爲し政を專にせしを以て阿魯台因りて内附し來り故主の仇を復せんと請へり帝之を許し阿魯台を封して和寧王と爲し遂に親征して忽蘭忽失温に至る馬哈木等の部落之を聞き來戰せり帝鐵騎を率ゐて馳突しその酋長部衆數千人を斬り大にその兵を破りて還りしかは後ち阿魯叛きて屢々邊に寇せしかは帝大に怒り討伐

せしが遂に病に罹りて崩せり永樂と改元す其在位二十二年壽六十五是より先き宮殿を北京に營み都と爲し京師を改めて南京と北京を京師と稱せり蓋し北京は帝の燕王に封せられし故土及び元朝の舊都なれば帝の初め此地より南下して篡立を謀りしもの地形の利亦預りて力ありと謂ふべし

又帝在位の時效益を後世に貽し者ハ會通河(江以北)の開浚是なり初め北京を建てしときは河海共に兼通せしが海運は險遠にして失亡多く河運は江淮より陽武に達し陸輓百七十里にして衛河に入るを以て民大にその勞に苦しみしかは帝之を憂ひ工部尙書宋禮に命じて九年の勞力を費し會通河を浚鑿せしむ會通河は元の運輸路にして濟寧より臨清に達せり開浚已に成りて民陸輓の勞を免れ糧運便利なりしかは海運自ら廢罷せり太子高熾立つ是を仁宗皇帝と云ふ時に我が紀元二千零八十六年稱光帝應永三十三年にあたり

仁宣の治世 内官の専恣

仁宗帝即位して楊士奇、楊榮、金幼孜、蹇義の徒を用ひて政事の過失を糾さしめ前代の時、奸黨を以て目せられ、黃淮等を赦し誹謗の令を除き方孝孺等の死を稱し事皆寛大を崇ひ賦歛を薄うし將士を憫恤し民皆その治を悦びしが在位一年にして崩せり太子瞻基立つ是を宣宗皇帝と爲す宣宗帝また頗る心を政に留め楊榮、楊士奇に命じて同く内閣の事を治めしむ時に漢王高煦反す帝親征して之を平げ高煦を廢して庶人と爲しその徒王斌皆誅に伏す初め成祖安南を平けて交趾布政司を置きしより後屢く叛せしか是に至り勢益々熾なり帝因りて成山侯王通をして討たしむ通敗れ安南と盟誓して師を退く幾はくならずして安南陳氏の遺臣黎利と云ふもの陳王三世の孫を奉りて來り封を續かしめんと求む帝之を左右に問ふ蹇義、夏原吉等は安南

に示すに弱を以てすべからずと言ふ楊士奇等は之を不可として曰、兵興りてより以來天下寧歲なり兵を發し安南を伐たんよりは寧ろその請によりて之を許し禍を轉じて福と爲すに如かすと帝之に従ひ陳高を封じて安南國王と爲し軍民をして地に還らしめ征南の師を罷めしめたりき

帝嘗て夏原吉に謂つて曰、近年有司人情を體せず饑荒あるも實を聞せず賑濟時を失ひ民をして餓死せしむる多し惟り河南新安縣の知陶鎔か輩は先づ賑給して後に聞す是れ良吏と謂つべし汝か輩文法にかゝわりてその專擅を極むるなかれと又周忱の議を用ひて濟農倉の法を定むるの制耕種の時貧民は戸毎に米二石を給し秋成のとき數に應じて官に還さしめ之を倉に畜へ早凶の節賑貸せめたり夏原吉は寛仁敬慎を以て帝を輔くる妙からず嘗て一隸服する所の衣を汚し懼ること甚し原吉曰、浣ふべし懼ることなかれと又獄を閱せし

とき再四吁嘻して筆を下さくりしかば夫人怪み之を問ふ夏吉日、吾か筆一下して死生決せん是を以て慘怛して下すに忍ひざるなりと帝の時は此等の賢者朝に立ち海内大に治まりしを以て後世明室の治をいふもの皆宣宗と並へ稱せざるはなし帝在位十年にして崩し太子祁鎮立つ是を英宗皇帝と云ふ時に我か紀元二千零九十六年後花園帝永享八年なり

英宗帝即位の初め楊士奇、楊榮、楊溥、薛瑄、蹇義等の諸賢才心を同くして政を輔けしが張太后薨せし後は帝専ら内使王振に任じ振を呼びて老先生と稱するに至る王振權を擅にし己れに反對のものは悉く黜陟し不法甚しかりしを以て太后嘗て帝に謂つて曰、楊士奇、楊榮、楊溥等は先帝任用の臣なれば汝の行ふ所にて計は彼に決するにあらずれば不可なりと因りて王振を召しその不律を責めて誅せんとせしが帝跪き請ふを以て果さざりき後ち太后及楊士奇等死するに及び王振威福

を作し劉球、薛瑄の賢良を害し生殺與奪の權の掌中に在りき蓋し太祖より内官を薄待せしが建文帝の時内官之を不平とし燕に告ぐるに京師の内情を以てせしかば燕王篡立して之を恩遇せしが内官愈々跋扈して其末路趙の護衛指揮孟賢は宦官黃巖と帝を毒殺せんと謀りし程なりしか宣宗に至りては内書堂を立てて宦官を教授せし爲めに内官讀書するもの輩出し外廷と交結するに至り遂に英宗の時に至りては太祖の禁を破り鐵牌を徹し専ら内官を寵せしが是の王振の如き徒を生ぜしなり

瓦刺の入寇

英宗の北狩

王振權を專にせし際蒙古瓦刺部の酋長也先と云ふもの大舉して入寇せり初め瓦刺は使者三千人を以て明室に入貢すべしと報して二千人來りしかば王振の詐を怒りその一人を斬戮せしを以て是より明と

好を絶ち大同に來り寇し過ぐる所陷没せざるはなす王振は帝を挾んで親征しその弟鄭王祚銓に命じて居守せしむ一時兵を聚合すること五十萬の多きに至りしも事草次に出で糧餉給せざりしを以て也先は明兵の大同に來るを待ちて四面より掩撃し殆ど明軍を殲せり王振廣楚等の諸將亦皆戰死せり也先遂に帝を擁して去る皇太后使を遣はし帝を請ふも許さざりしを以て王振祚銓を立つ是を景皇帝と爲す于謙を以て兵部尙書と爲す群臣怒りて振が党屬順其姪王山等を擯し宗屬少長となく皆斬らる振が家は京城内外數處にあり堂閣門樓王居に玉盤百數珊瑚高さ六七尺なる者二十餘株金銀庫に充積せりと云ふ

于謙の黨獄

石亨の謀叛

景皇帝即位して英宗を尊ひて太上皇帝と爲す也先之を聞き上皇を擁

して入寇して大同城に逼り金幣を奉じて上皇を還さんことを約す都督郭登堅く門を關して開かず上皇の侍者袁彬と云ふもの頭を門に觸れ號泣して請ふ因りて已むことを得ずして城中の銀萬餘兩を括して上皇を贖ふ也先咲ひて擁して去り後ちまた柴荆關を犯す廷臣恐れて南還を議す于謙叱して曰遷るを云ふものは斬らん靖康の覆轍奈何う蹈むへげんと兵馬司をして城外の倉場草料を焼かしめて曰寇に資するなけんと大に勤王の兵を募る也先また進みて京城を犯しとも明軍大に之を拒きて敗走せしむるもの數はなりしを以て也先遂に志を得る能はずして上皇を棄て還れり後ち幾はくならずして也先はうの初め韃靼主脱々不花を弑せしを以是に至りて不花の遺臣阿刺の爲めに弑せらる阿刺また韃靼部の孛來の爲めに殺さる孛來は律々不花の子麻兒と云ふものを立て小王子と號せり是より韃靼の勢またさかんなりき

上皇還りより後ち帝は、上皇の太子見深を廢して沂王と爲し己れの子見濟を立てて太子とせしより互に不和を生せしか武清及石亨等は帝の病篤きの際に副都御史徐有貞内使曹吉祥等と、上皇を位に復せしむ景帝又幾ばくならずして廢せられて都王と爲り遂に崩たり時に英宗復位の天順元年にて我が紀元二千百十七年後花園帝の長慶元年なり「英宗は復辟の功を以て石亨徐有貞等を内閣に置き機務に參せしめしかば石亨曹吉祥等また寵任を恃み王文、于謙等を獄に下す初め景帝の時皇太子見濟即ち英宗の太子卒せしかば王綸鍾同は沂王を立てんとせり景帝怒り鍾同王綸を杖殺せしがうのとき進士楊集と云ふもの于謙に上書して曰公等は國家の柱石なるに後を善くする所以を思はずや二人已に杖下に死せり公の議は如何と謙爲めに大學士王文に示す文曰、此れ書生未だ朝法を諳せしめて此の如く云ふなりは議遂に不問に附せしが後ち、景帝不豫の際宣宗の弟襄王を立てんと

せし故を以て是に至りて謙の謀に與かると誣ふ然れども跡の按ずべき無し石亨曰、彼が意欲此の如くと遂に謙等を殺しうの家を籍す凡う亨等の隙あるもの皆うの羅織を被らざるはなり後ち帝謙が冤を悟り大に之を悔いし石曹等愈々驕横にして徐有貞を譏りて獄に下し李賢岳正等を逮繫す蓋し李岳は當時入閣して機務に參せしが爲めなり後ち李賢は赦されしが當時石亨は賄賂を以て人を黜陟し威容愈々盛んなり帝堪ふること能はざるを以て之を李賢に謀る賢が曰、宜しく獨斷すべし人主の權下に移すべからずと亨已に異志を蓄へ大同城の人馬は京師より衆きを以て從子彪に命じてうの軍を督し外援と爲し將さに兵を擧げんとせしが事見はれ捕へられて獄中に死しうの党また誅戮せらるる時に天順五年にて我が、紀元二千百二十年なり

大明一統志此時に成れり石亨誅戮後は吉祥また自ら安ぜず其養子の

欽と共に不軌を蓄へ廢立せんとて欽を以て兵を率わて城外を攻めしめ已れ帝を幽して内より應ぜんと計りしも事成らずして亨欽等は磔せられろの徒また誅せられたり

帝初め位に即き十四年にして北征し虜に陥り還りて太上皇と爲るも七年復位八年にして崩せりその死に臨むや内官牛玉に命じて代書せしめて曰、妃嬪を以て葬に殉はしむるなかれと蓋し太祖以來殉葬の制行はれたるが故に李賢帝に謂つて曰、これ眞に盛徳の事なり此一事尤も千古に卓越すと帝幼冲を以て位に即き世故に通ぜざりしが北狩の日艱苦を歴て人情に達し復位の際一時奸臣に制せられしも晩年奸惡の徒を誅し専ら李賢の任に政事大に整へり賢またよくその職を修め帝を輔導せしを以て時人稱して内閣の事功は三楊楊榮、楊士奇、楊溥と云へり太子沂王見深立つ是を憲宗純皇帝と爲す時に我が紀元二千百二十五年にあたり

汪直、劉瑾の専權 安化王の反

憲宗の時外には鞏固延緩に寇して西邊争擾し内には汪直權を專にして屢々大獄を起し賢才を排斥せり初め帝西廠を立て民の利害官屬の賢否を刺察せんとし汪直をしてその事を主らしむ汪直是に由りて専恣甚しきを以て帝西廠を廢し之を制せんとせしも亦何如ともする能はざりき汪直はもと大藤峽の猺種にて幼より禁中に入り内官と爲り寵任を得たり帝の晩年遼西の散出哈入寇し又鞏固の小王子兵を率わて大同に寇す汪直監軍と爲り散出哈の兵を破りまた鞏固を威寧海に掩撃せしかば鞏固大に怨み爾後屢々入寇せり是より先李汝省と云ふもの符水をも以て寵を得しが是に至りて汪直を讒黜し僧の繼曉と共に機務に参り威福を作せり憲宗在位二十二年にして崩じ太子棧立つ是を孝宗皇帝と云ふ時に我が紀元二千百四十八年

なり

孝宗帝果斷にして頗る心を政事に留め李孜省を誅し繼曉及びその黨を罰し又詔して直言を求め萬安、劉吉、尹直等の小人を黜け王恕、王竑、彭韶等の君子を用ふ晩年韃靼及び哈密入寇せしも張海、王越等を以て討代せしめたり哈密は漢の西域唐の伊州の地にしてその北なる天山は瓦剌と相界し西は火州に接して諸胡の要路たり劉大夏軍政の弊事十條を上り自らその任にあたり大に改革する所あり帝は弘治と改元し在位十八年その間朝廷清明人民恵を被れり帝崩じ太子厚照立つ是を武宗穆皇帝と云ふ時に我が紀元二千百六十六年後柏原帝永正三年にあたり

武宗帝初め東宮に在りし時に内使の馬永成、谷大用、劉瑾、張永、魏彬、羅祥、邱聚、高鳳等事を用ふる猛惡なり時人稱して八虎と云ふその中劉瑾は尤も膾炙にして帝の即位に及びてその党と互に伺候し狗

馬鷹犬角觝を爲し帝に阿媚せり瑾常に王振の人と爲りを慕ひまた讀書に通ずるを以て愈々信任を得て劉大夏劉健王岳等の賢才は皆廢黜せられたり』後ち載銑と云ふもの權閹を黜けんと乞ひしを以て罪せらる王守仁之を救ひしを以て遂に貴州龍場に謫せらる此の如く瑾は己れに異なるものを禁錮せしも猶ほ憾みて王守仁、楊守隨等の君子五十三人を奸黨と爲し朝堂に榜示し專擅を極めたり』是より先、劉瑾は大理寺少卿周東を寧夏に遣はし苛斂掎克せしかば慶府の安化王寘鐸は是に於て劉瑾を誅するを以て名とし周東及び巡撫總兵官を殺し遂に兵を擧げて反し京師大に震へり帝乃ち楊一清、張永、仇鉞等に命を討平せしむ

後ち張永は劉瑾と權勢を争ひ不和を生ぜり時に盜賊蜂起し國內争擾せしかば張永帝に言ふこれ皆瑾が專制の激成するところ故に彼また自ら安せず不軌を謀る今陛下早く擒らせされば我輩恐らくは蓋粉せ

られんと帝之を信し即夜之を擒し坐するに謀逆を以てす諸瑾の爲めに害を被りしもの争ふてその肉を啖ふに至るその家を藉せしに金銀寶玉積みて山の如しその党焦芳等また罰せらる瑾政を執る五年その間に吏兵二部の選法を改革し又日夜天下の庫藏を括し巡捕巡鹽官を設け四出せしめ屯田賦税を貪れり蓋し宦官の横未だ此にすぐる者あらざるなり」劉瑾眞鍮の二難の平きは張永の功なりとて帝の宗族を封し寵任せしが爲めに權柄内官の手に歸し魏彬馬政等愈々跋扈し朝政大に亂れ兩河の南北其他楚蜀の盜起り天下益々多事なり」然るに帝恬として顧みず日に佛を好み自ら大慶法王と號し詔書また法王の名號を用ひ諫むる者あれば悉く誅す後ちまた韃靼語を習ひ自ら忽必烈と命し回々語を習ひ妙吉敖爛と稱し蕃僧語を習ひ領古班丹と號せり又錢寧江彬等帝の佛を好むに乗し帝を誘ひて僧と婦女とを同乗して外出せしめ後ち又大同宣府遼東延緩四鎮

の兵を京師に入れ群閹の善射者を以て帝の軍と爲し晨夕馳逐戲遊せしむ彬はもと内官の家人より狡獪を以て帝の寵を得たるものなり

宸濠の叛

江彬の奸佞

帝佛を信するの餘大内に居るを厭ひ豹房(西番の)を以て家とし朝政一に彬に任し巡狩遊樂を事とせしかは海内騷然として四川の劉烈陝西の藍廷端鄆本恕黎惠等の諸賊蜂起し江西の諸郡穩ならざるにまた寧王宸濠の叛逆あり初め帝嗣定らざるか爲めに廷議して儲を建てんとす時に錢寧は寧王の賂を受けてその子を立てんと謀りしが錢寧は適ま江彬と寵を争ひ軋轢せしかは江彬は錢寧の寧王に通せるを彈劾せしを以て寧王は向きの異謀を懷きしか是に至り不平愈々積鬱して南昌に據りて叛し南康九江を下し安慶を圍み江西の諸賊之に應し勢太九猖獗なり」時に王守仁命を奉りて往きて福建の賊進貫等を

平けりか變を聞きて還り伍文定と諸路の義兵を募り賊を討ち直ちに南昌に逼らんとす或人安慶を救はんと云ふ守仁の曰、九江、南江は己の賊の據るところと爲るも一城を越えて安慶に趨かは賊必ず軍を還して死闘せん是れ腹背敵を受くるなり直ちに南昌を搗き彼をして圍を解き自ら救はしめは勝たざることなけんと遂に南昌に進む宸濠は南昌の急なるを聞き果して安慶を棄てて歸る義兵迎へ撃ち宸濠遂に執へられ賊党悉く平く初め宸濠の夫人婁妃の反を諫む是に至りて檻車中にて痛歎して言ふ昔紂は婦人の言を用ひて亡び今我は婦人の言を用ひして亡ふと守仁後ちうの賢を聞き婁妃の屍を求め之を葬るといふ守仁嘗て江西に提督たりるとき侍郎李士實己に宸濠と通す一日守仁宸濠と宴す士實また座にあり宸濠口に政事の缺失を論じ外に愁歎を示す士實の曰、世豈湯武なからんやと守仁曰、湯武また伊呂を用ふと宸濠の曰、湯武あれば伊呂ありと守仁曰、伊呂あれば

何う夷、齊無きを患へんと宸濠の意湯武を以て自ら任り伊呂を以て李實に比せしを悟り遂に預め之か備をなすといふ
帝は江彬の勸に依りて親征の師を出せしか途にて守仁の賊を平くるを聞き師を還し南京に駐る守仁俘を献せんと請ふ江彬及び内使張忠等はうの功を嫉んで帝をして宸濠を縦さしめんとせしも許されず後ち宸濠囚はれて通州に至る帝命して自盡せしめ守仁の功を賞し又張忠に命して餘党を捕へしむ江西之を苦む而して守仁は之を待つに禮を以てせるか故に餘党皆曰、王都堂は犯すべからずと江彬前に異志を蓄へしか是に至りて帝に南京に従ひ一日各城門の鎖鑰を索め計を行はんとせしか兵部尙書喬宇の詰責する所と爲り其計沮めり帝また佛を信するの餘、南京にありて詔して民間の猪を養ひ及び賣買屠殺するを禁す蓋し國姓なる朱は猪と音通なるを以てなり帝還り疾に狗房に罹りて崩す嗣なく憲宗の孫厚熹を迎へて立つ是を世宗

肅皇帝と爲す時に帝の嘉靖元年にて我か紀元二千百八十二年にあ
たれり

守仁の貶讒

北虜の猖獗

世宗の時にありて江彬は天下の己れを惡むを知り反を謀る楊廷和私
かに謀を以て之を捕ふ帝江彬を誅するの家を籍し金銀財寶數千萬を
得たり』帝の未だ京師に至らざるや廷和は朝政を總ふること三十七
日中外依りて安ず登極の後ち言上して前朝の弊事を改めたり時に廣
西の岑氏、亂を作す帝王守仁を起して兵部尙書とし兩廣の軍を督し
之を討平げしむ後ち斷藤峽の猿を平げ又兩廣の爲めに數十年の賊害
を除き大に士民を得たり初め守仁命を奉して廣西の賊を平げしとき
禮部尙書桂萼と云ふもの機に乗じて交趾を取るを勸めしむ守仁應ぜ
ざりしかば是に至り守仁を讒す守仁また病を以て任を離れ道にして

南安にて死せり守仁は浙江餘姚の人字は伯陽、陽明山人と號し平生
講學を以て任ずるの學程朱を宗とせず格物致知は之を心に返すへ
とて良知を致す説を以て主と爲し著はす所の傳習錄陽明全書等あり
後世の學を王學と唱へ朱學と並へ稱せり帝の擅に任を離れたる
は人臣の禮にあらずとてその功罪を議せしむ桂萼言ふるの生徒を號
召し邪説を唱へ先儒を誣毀せしなれば逆濠を勦捕するの功は録する
に足るも邪説の禁は姑貸すべからずと帝之に従ひるの子孫の封を奪
はしむ後ち隆萬(隆慶 萬曆)の時に至り文成と諡し從祀廟食せられたり
是時楊廷和卒す帝有司に問ひて曰、大倉の積む所は幾何ぞと對へて
曰、數年を支ふべし陛下初年に冗員を裁革するの致す所なりと帝慨
然として曰、これ楊廷和が功なりと隆慶の初め文忠と諡せり是より
先、閣臣相傾軋し謹憲やまず張璠、桂萼等罷められて瞿鏞、李時入閣
し一時政府稍く寧かりき

然るに帝は方士の段朝用の黄白の術金丹の薬を信するの徒兼一、陶文仲等を寵用し日々齋醮を事とし朝を視せり。かば禮部尙書嚴嵩大に事を用ひ小人を援引し朝政を紊亂せり。

時に韃靼小王子兵を厭ひ土蠻と稱し東方に徙り。かろの族の吉囊及び俺答等雄黠にして兵を喜み河套に居て諸部の長と爲り諸邊を蹂躪せしを以て劉天和、吳璜等の邊將討平せし。か後ち吉囊死しその遺族河套に散在して俺答と大同宣府とに入寇し直ちに保定、通州により京師を犯し進んで西山、良郷以西を轉掠せし。かば曾銑仇鸞の諸將をして防かしめし。も克つ能はずして虜の勢愈々猖獗なり。』是より先き帝は寵人曹妃の家を幸し既に寢せし。かば宮婢楊英と云ふもの組を以て帝の頸を経す張金蓮と云ふもの奔りて后に告く后奔りて帝を救ひ楊英等を誅し曹妃に及ぼせり此の如く内外擾くの時に乗し嵩は奸惡を擅にせし。かば楊繼盛と云ふものろの十罪を奏し遂に誅戮せられ

し。か後ちろの罪見はれて嚴嵩及ひろの子世蕃等誅に服せり

沿海の倭亂

俺答の封貢

かく北邊には韃靼侵寇せる時に際し東南沿海の地には我日本人の侵略を試みたるあり是を倭寇と稱し大にろの防守に苦めり。』初め太祖の時我が邦民の侵略を畏れ之を祖訓にあらはし子孫を戒めし程なり。

しが世宗の時に至り又寧波浙海等の沿海の郡邑を掠めらるゝに至れり。蓋し太祖の時我が日本に絶ちし。も福建、浙江、廣東に市舶司を置き我が商船の往來のみは許したりしが是に至りて我が商船は入港の先後を争ひて明商と鬪争し浙江を亂し。かば明廷は遂に市舶司を罷め海禁を寛うせり明商海禁の弛むに乗じ奸利を爲し我が商民を苦めし。も官司之を禁せざりし。かば我が邦人大に怒り台州を犯し黃巖を破り大に象山、定海等の諸邑を掠め南京に及べり明廷は王忬、俞大猷、戚

繼光等に命じて前後討伐せしめしが明人不平の徒にして汪直、徐海、毛海峯、彭老生等我が邦人に加はりしかば東南の争擾甚かりしが汪直等の降服せしより浙江の地は差や寧かりし後ち我が邊民は逃れて臺灣の一島を占領したりき蓋し當時我が足利氏の末路戦亂時代に當れるを以て我が商人といへども戦亂に狙れ死を懼れず南京を犯ししもの如き僅かに六十餘人に過ぎずと云ふ又明史傳へ云ふ倭は勇にして懸、死生を別たさず戦ふごとく赤體にて三尺の刀を提舞してすむときは一人も敵するものなると又言ふ帝倭賊の江浙沿海を犯すを患ひ侍人趙文華をして海神に祭告せしと當時明廷の我が邦人を畏るゝ此に至る亦快と謂つべし

帝在位四十五年にして崩じ嘉靖と改元す皇子載坫立つ是を穆宗莊皇帝と爲す時に我が紀元二千二百二十七年正親町帝永祿十一年にあり

穆宗即位の初め俺答及びその子黄台吉數々山西を犯ししかば後ち數年を経て入貢せり初め俺答の孫なる把漢那吉と云ふもの俺答の外孫女を娶りしかば俺答の美を喜び之を奪ふ把漢恚りて其屬十餘人を率ゐて來歸せり大同の總督王崇古之を留め衆に謂つて曰、此れ奇貨なり漢の質子の法の如くにして撫納してその故部を招き近塞に居らしめん俺答年老ゆるの子黄台吉勢必ず悉くその衆を有する能はざらん乃ち把漢をして還らしめ衆を以て黄台吉と抗せしめ我れ兵を按して之を觀る安邊の大略なりと廷議また之に従ひしかば俺答か婦、明のその孫を我はんことを恐れ俺答十萬の衆を擁して入寇す崇古諸道に檄し兵を嚴にして之を禦き諭すに把漢を存郵せんことを以てせしかば傑答其婦と大に感して曰、漢肯て吾孫を全くす吾れ臂を噛んで盟ひ世々服屬して貳なげんと遂に封及び互市を請ふ崇古上言すらく朝廷の封貢を許さば諸邊數年の安あらんその間兵備を嚴にすし若し

彼れ盟を背かは吾れ數年蓄養の力を以て事に從ひ戰守せんと封貢八事を條して請せしかは廷議之に從ひ俺答を順義王に把漢を昭勇將軍にうの徒官を授くる差あり是に至りて邊患稍や息む後ち萬曆神宗のの初め俺答か居る所の城を名けて歸化といひき帝の時には陳以勤、高拱、張居正入閣して政事大に見るべきあり帝在位六年壽三十六にして崩す太子翊鈞十歳にして立つ是を神宗顯皇帝と爲す時に我が紀元二千二百三十三年にあたり

張居正政を執る 朝鮮援と求む

神宗即位の時に高拱張居正遺詔により政を輔くへかりし居正は大監馮保と結托して拱を排し己れ首輔と爲り政柄を得て慨然として天下を以て己れか任と爲す居正深沈にして才幹あり先朝にありて釐正する所ありしを以て天下皆其丰采を想望せりうの政を爲すや大約主

權を尊ひ吏實を考課せり時に一の無鬚の男子内使と假稱して殿中に入る左右之を鞠問す居正陰に之に囑して曰はしむらく閣老高拱の陰に皇上を刺さしめんとするに係ると言未だ畢らざるに兵を高の所に遣はす楊博、白一清等居正に謂ひて曰、高老は顧命の元老我輩何う之を誣ひて刑を加ふるを得んと時に居正の党朱希孝等事の泄れんことを恐れ審議を罷めしか爲めに拱また幸に虞なかりき然れども居正の威權は日に熾なり後ち病を以て卒す居正初め帝の東宮にありしとき經筵に侍す帝論語の色勃如也と云ふを讀み誤りて背と爲す居正聲を厲まして曰、誤れり勃と讀むへしとうの嚴正此に類す後ち或は天下の田を度り富國の術を講し或は宗藩要例書を頒ちて藩王を統督し或は帝鑑圖説を進めて君徳の養成を爲し大に帝を輔け綱紀を整へしと少からすといへども剛復自ら用ひるの二子嗣修、懋修等をしてまた朝に立ち專斷せしめしか爲めにうの死後幾はくならずして言者の紛

とを招き籍没せらるゝに至れり然れども相業に至りては明朝希有の人と謂ふべし

是より先き朝鮮は李成桂の裔李暉と云ふものに至り荒淫にして國政大に亂れしか是に至りて我が豊太閤道を朝鮮に假りて明國を伐たんとし李暉の命を奉せざりしかは太閤大に怒り舟師を起す所の將小西行長加藤清正等對島より釜山に至り王京(漢陽)に入り朝鮮八道の蹂躪する所と爲る李暉王鳴綠江を渡り内屬を求め援を明廷に乞ひ使者路に續く帝乃ち遼陽の總兵祖承訓等をして之を援はしむ行長は祖承を平壤に敗る祖承僅かに身を以て免る帝因りて侍郎宋應昌、總兵李如松をして援はしむ行長退いて王京を保つ李如松輕出して我が邦人の掩撃に遇ひるの精銳を喪ふ甚た多し是より先き兵部尙書石星、遊客沈惟敬等をして行長の營に行き和を講せしめしか是に至りて和議遂に成り我が將行長清正等一時兵を撤して王京を去れり

後ち和破れて我が邦軍また朝鮮を陷る初め沈惟敬等か和議を講し璽書を奉りて來りて太閤に見ゆるや太閤の書中に汝を封じて日本國王と爲すの語あるを見て大に怒り叱りて曰吾れ自ら日本を覇有すも一王號を稱せんと欲せば何う彼か力を借らんと書を裂き地に擲ち再び行長清正等に命じて兵二十萬を發し朝鮮を征せしむ明廷は劉綎等をして之を援はしむ交戦する歲餘に及ひ利あらざりしか明將邢玠は行長の清正と意好からざるを知り専ら蔚山に趨り清正を攻む清正三柵を結んで自ら固くし遂に其敗らるゝ所と爲る時に豊太閤の卒するに會ひ清正行長等遺命を奉りて師を班す朝鮮の兵興りてより七載師を喪ふと數十萬餉を糜すと算なし是に至りて其禍始て止む時に萬曆廿五年にて我が紀元二千二百五十七年後陽成天皇慶長三年なり

清祖の興起

礦稅の弊害

神宗の時北方にあたりて奴兒哈赤と云ふもの長白山麓に崛起せり奴兒哈赤、姓は愛親覺羅氏(愛親は滿州語にて金と稱す)東韃靼建州の女真部の人なりうの先布庫呈羅順と云ふもの長白山下に居り其後ち孟特穆(明の英宗時代の人)は赫圖阿刺に居るより歷傳して奴兒哈赤に至り滿州諸部落を併呑し遼陽に至り南關を陥れ遂に滿州に即位して後金と號し明廷を指して南朝といひ尊號を覆育列國英明皇帝と稱し天命と改元せり又蒙古字を集めて國語と爲し滿州文字を創立し部民を愛撫教訓し遂に大舉して明の開原、欽嶺等の諸城を陥れ蒙古宰賽等を破り葉赫を亡ぼし明の援兵を屠り朝鮮の元帥姜宏立を降服せりうの疆域西は遼東より東は海に至り南は朝鮮に至り北は蒙古科爾沁の黑龍江に至り凡う語音同通の國征服せざるはなし是を清の太祖皇帝と爲す

是より先き寧夏の拜塔、四川の楊應龍等反を謀る拜はもと韃靼種な

りうの軍士を嚇し明の邊將張維忠等を殺し河西四十七堡を陥れ全陝震動せしか李如松遂に河を決し寧夏の據城に灌き之を平ぐ楊龍應も一時四川を争擾せしか川湖貴州の軍務總督李化龍命を奉りて討平せり

かく内外多事にも拘はらず兩宮を建築し國帑日に疲弊せるか爲め工事殆ど廢せんとせしを以て山西、汝南、夏邑等の諸州に於て礦を開かむ其費鉅萬得失相償ふ然るに礦を開き工を助けんとするもの踵ぎて至る帝毎に中使を遣はし開礦を言ふものをしと讒向を首め諸州に採掘せしむるの後ち各省稅使を増設し天津の店租、廣州の珠鹽、浙江、福建廣東の市舶其他質抵の魚葦及ひ門攤の商稅等の如きは論なく都邑關津に於ては中使絡繹若布して至る所に奸民亡命を招きて爪牙と爲し開礦費を收歛す其害言ふべからず爲めに民大に怨望し變亂愈々起る國帑愈々弊れしか爲めに各省の積儲を敷し一時の急を逃

れんとするに至れり』是時又齊、楚、浙の党派あり齊は詩教、韓浚、周永春、之か魁たり楚は官應震、吳亮嗣、之か魁たり浙は劉廷元、姚宗文、之か魁たり是等の徒務めて東林黨を排し道學を攻むるを以て事と爲す初め吏部郎中顧憲成は帝に忤ひ家に歸りて學を東林書院に講ず(書院は宋の楊時の名なり)後ちうの徒鄒元標、趙南星等各々書院を建て講習の餘時政を諷議し人物を裁論し一時うの名天下に高く是等の諸黨相軋して國事日に非なりき

帝在位四十七年にして崩じ太子常洛立つ是を光宗皇帝といふ帝即位直ちに病む内醫崔文昇通利藥を投す一晝夜に三四十起す楊漣文昇か藥を用ふるの誤を劾す已にして寺丞李可灼紅丸を進む帝之を服し即夜に崩す時に中外噴々として可灼を咎む在位僅かに一月にして崩す太子由校立つ是を熹宗皇帝と云ふ時に我か紀元二千二百八十年にあたり

三案の争

東林黨の貶黜

熹宗帝の時には三案の争起れり三案とは挺繫、紅丸、移官のことはなり初め神宗の時張差と云ふもの棗木棍を以て東宮に闖入せしめ内宮を傷けて執はれたり當時鄭貴妃の意を受け太子を弑しうの子福王を立てんと疑あり是を挺繫の案といふ後ち光宗帝紅丸を服して崩せしか宰相の不注意を責むるを紅丸の案といふ又光宗崩御の際御史楊漣の議に従ひ李選侍を仁壽殿に移しより先朝の貴嬪を薄待せりとの流言あり是を移官の案といふ此の三案を以て諸黨派相争ひ軋日に甚かりしか非東林黨なる魏廣徵、呈秀等は帝の寵臣宦者魏忠賢等に結託して東林黨を排除せんことを務めたり

忠賢初め進忠と稱す帝の母王氏の典膳たり王安に結ひ禁内に出入し乳媪容氏に通じ帝の寵を得て名を忠賢と改め詔を矯りて王安を殺し

益々憚る所なし凡そ宮嬪内侍に至るまで賢忠、容氏に協はさるものは百計之を貶黜せざるはなし時に東林黨勢盛に韓爌、鄭三、李邦華、高攀龍楊漣、左光斗等激揚して議し忠賢頗る之を憚る時に非東林黨なる呈秀は淮陽を按じて東林黨なる高攀龍趙南星の爲めはうの賊私を發せらる呈秀爲めに哀泣して忠賢の養子と爲り南星、攀龍か輩は皆東林の邪黨なりと讒す忠賢廷臣の己れの罪を攻むるを以て事端を假り正士を傾陥せんと思ひし時なりしかは喜ひて呈秀を薦用して已れか腹心と爲り反對の党派を排し楊漣、魏大中、惠世揚、劉策、朱世守等の廷臣を獄に下し又天下の講學書院を毀たしめ講學の諸子まで罪し顧憲成以下を目して東林の奸党と爲り遂はうの徒を誅戮せしか帝の罪惡を悟ること能はずしてうの生祠を西湖に建て石に功德を勒し閣臣をして頌德表を作らしめ又うの祠に至りて拜せさるものは籍を削り論死せらるるに至れりと云ふ

時に貴州水西の土豪安邦彦等叛き炎方、松林を陥れ安南を圍む山東の徐鴻儒また亂を謀り四川永寧の宣撫司奢崇明の子寅と反して瀘州等を陥れ成都を圍み蜀土震動せりまた海寇鄭芝龍と云ふもの海島に踞りて商民を劫截して閩廣の間に往來せり是より先、奴兒哈赤の兵は入寇して瀋陽に薄る熊廷弼初め遼東を經畧し能く滿州の兵を拒きしか言者の爲めに効せられて朝議は素應泰を以て遼東を經畧せしめしが奴兒哈赤は遂に瀋陽及び遼陽を陥れ勢大に振ふ明廷は再び廷弼を起さしめしも廣寧の巡撫王化貞、兵部尙書張鶴鳴等と意見合はざりしかは廷弼の奏議行はれず廷弼憤り關を出てく右屯を守れり

清祖瀋陽に都す 獻馬李の亂

清祖奴兒哈赤は瀋陽、遼陽を取るに及びて自ら遼陽に都せんと欲し

貝勒諸臣に謂つて曰、今此城に克つは天の我に授くるに遼陽を以てするなり且つ此地は明蒙古朝鮮と接壤要害の區なりと遂に妻子を迎へて此に居り更に城を遼陽の東太子河邊に築き之に遷居し名けて東京といひまた東京より瀋陽に遷り遂に殂す壽六十八第八子皇太極位に即く是を太宗文皇帝と爲す太宗勇武奇偉父に類しよく兵を用ひるの境域次第の大なり」明廷は魏忠賢等腐敗の徒日に勢を得るの運命推して知るへし熹宗在位八年にして崩じ其弟信王由檢立つ是を毅宗（一に熹宗といひ又年號といひ）帝といふ時に我が紀元二千二百八十八年後水尾帝寛永五年にあたり

毅宗帝もとより忠賢の惡を稔せし即位の後ち廷臣交々其罪を劾するを以て首として忠賢及び王氏其他黨與を誅戮し又廷臣の近侍に交結するを戒め士庶衣服の侈僭及び婦女の金冠袍帶等を禁ず」時に鄭芝龍歸順し海氛漸く息みしか陝西饑多流賊大に起る府谷の人王嘉胤

亂を倡へ延安の人張獻忠嘉胤に従ひ陰謀多し賊中之を八大王と號するの部最も強し時人之を獻賊と稱す」安塞の馬賊高迎祥また起る自ら闖王と稱す饑民王大梁等之に應ず
後ち王嘉胤は久しく河曲に據りしか曹文詔の爲めに討せられて遁れ去りろの左右の殺す所と爲るろの黨王自用と云ふもの高迎祥張獻忠と兵を合して山西に聚り勢甚だ猖獗なり

是時また陝西米脂縣の人李自成と云ふもの高迎祥に依り闖將と號し張獻忠等と道を分ちて四出して大寧隰州澤州壽陽の諸州縣を陥る後ち迎祥死し闖王と爲る張獻忠は湖南より蜀に入り成都を陥れ遂に四川を奄有せしか遂に病を以て蜀中に死し李自成勢獨熾なり自成はもと遠圖なかりしか河南地方を席捲し群賊數百萬衆を有するに至りて始めて侈然として天下與に争ふものなりと思ひ自ら奉天倡義大元帥と號し羅汝才を代天撫民德威大將軍と稱す尋いで汝才を殺しろの

衆を併せ是に至りて居庸關に入り昌平を陥れ平則、彰義等の門を攻む城外の三大營皆潰へ降る戰器巨礮皆うの有と爲る自成勢に乗じて京師(即ち)を犯す守兵扞くこと能はず帝乃ち公主及び后妃を殺し自ら衣襟に遺書して曰、朕涼德にして天咎を犯す面目の祖宗に見ゆるな一朕の尸は賊の分裂に任すも百姓は一人だも傷くることなかれと遂に萬歲山に登り自經せり」賊の居庸關に入りとき内官杜之秩、曹化淳、杜勳等は皆吾黨の富貴自らなりとて降服せり而して范景文、倪元路、施邦曜、凌義渠、王家彦、孟非祥、馮世奇、劉理順、吳麟徵、周鳳翔等の數十人は皆難に殉せり是より先き京師危急なりか爲め寧遠の總兵吳三桂を關門に移し京師を援はしめんとせしか軍猝かに至ること能はず是に至り京師陥り帝、后また難に殉ふを聞き遂に縞素して哀を發し清に降り援兵を乞ひ自成を討たんと求めたり

清兵の南侵

帝由松南京に即位す

初め清の太宗瀋陽に都せし以來師を率わて入寇し洪山關より遵化永平、遷安、灤州等を陥れ又蒙古の察哈爾を伐ち軍を旋へして大同宣府を攻め遂に四路より明を征し大に明軍を破り凱旋して功臣を封し官名を定めろの都瀋陽を改めて盛京と爲し國號を建てて大清と稱し諸蕃まで服せしか惟り朝鮮の服せざるを以て遂に親征の師を起し八道を蹂躪し王京を陥れ國王李倭を南漢山城に圍みて之を降服し鋒を北に轉して明兵を破り畿輔の城數十を陥れ天津に至る遂に錦州を圍み又薊州を陥れ道を分ち南侵せしか太宗遂に崩し子福臨立つ是を世祖皇帝といふ世祖また其叔父なる和碩睿をして國事を理制せしめ多爾袞をして明を伐たし多爾袞進み遼河に次せし時明の京師陥り吳三桂援兵を請ひしを以て世祖は多爾袞をして之を援はしめ大に自

成の軍を破り、かば自成は北京(即ち燕京)の宮殿を焼き西走せるを以て多爾袞は世祖を迎へ北京に都せしめ又官民をして服を脱し頭を剃らしめ衣冠悉く清の制に遵はしむ爾袞また兵を率ゐて更に山西を定め陝西に入りて自成を破り、かば自成は後ち數年を歴て湖廣に走りて殺されたり』初め京師陥りし時神宗の孫帝の兄由崧は賊を避けて淮安に船せしが是に至りて南京府の遺臣相議して之を立つ帝由崧と曰ふ時に我か紀元二千三百五年後光明帝正保二年にあたり

明清の交戦

明室の滅亡

帝由崧位に即き南京に都し兵部尙書史可法及び鳳陽の總督馬士英等入閣して事を辨す後ち可法請ひて師を江北に督し士英獨り國を專らせり清の攝政王多爾袞は書を史可法に贈り明主の金陵に立つを責めて明室に歸降を勧めしか可法また大義を以て答書して服せず因り

て清兵は南下して河南山東の州縣を下す可法は清兵を揚州に破り奮戦して死す清兵既に揚州を破り江に沿ひて淮を渡り遂に鎮江に向ふ帝は尙、諸内臣と圍坐し酣飲せり清兵遂に南京に逼りしを以て帝狼狽して太平に走る馬士英は太后を奉りて浙に走る清の豫王多鐸已に京を陥れ帝また江寧縣に囚はる時に廷臣張捷、楊維垣等殉難の士數十人を除くの外は大抵降服せり多鐸既に江浙を定め帝及び大監王之明を挾んで北京に去れり』初め揚州城陥り可法死し諸臣次第に清軍に降れるとき百川橋下の乞兒詩を橋上に題して曰、三百年來養士朝。如何文武盡皆逃。綱常留在卑田院。乞丐羞存命一條。と遂に水に赴きて死す』是の時太祖の裔唐王聿鍵福州にありしか黃道周張肯堂、吳脊枝、鄭芝龍の諸臣會議して立つ是を帝聿鍵と爲す時に我か紀元二千三百六年にあたり

帝聿鍵また在位一年にして清兵に捕へられて斬殺せらる黃道周は兵

を江西に募りて恢復を圖りしも遂けず阮大成等は崖に投じて死し士英等四人また殺され福建遂に陥れり。兩廣の總督丁魁楚は廣西の巡撫瞿式耜等と謀りて桂王の子神宗の嫡孫を肇慶に立つ是を帝由榔と爲す

初め福建の舊相蘇觀生等遁れて廣東にありしは是に至りて布政使顧元鏡と隆武帝(帝年號)の弟唐王聿錡を擁立して廣州に據りしを以て瞿式耜等國家の利害を論諭して帝と力を共にせんとせしも議整はず互に相闘きし清兵は廣州に入り唐王を執へたり帝また清兵の爲めに逼られて梧州より全州に逃る清兵また全州にせまり城中大に亂る時に張同徹は靈川より來り瞿式耜に謂つて曰、事逼れり公まさに奈何せんすと式耜の曰、封疆の臣は封疆あるを知る封疆既に失せば身將た安にか往かんと事の能はざるを知り諸勳を召し訣飲して共に執へらる二人一室に幽せられ日に共に詩を賦し賡和せしか遂に害に遇

へり瞿式絶命の詩に言ふ從容待死與城亡。千古忠臣自主張。三百年來恩澤久。頭絲猶帶滿天香。と帝は己に永昌より出奔して潯州に徙り又南寧に逃れ遂に緬甸に入れり

是より先き帝聿錡の時に當りて魯王以海は紹興にありて監國を稱せし帝の時に至り福建の沿岸を鎮し後ち舟山を取り是に至りて清兵の爲めに舟山を失ひしはばうの臣張名振の爲めに奉せられて廈門に逃れ往きて鄭成功に依れり

成功は芝龍の子にて森と稱す風儀俊秀にして大志あり父初め落魄して我日本に來り我邦人の女を娶りて森を生む森我邦にあること七年にして遂に去る後ち毎に東向して母を望む叔父鴻逵うの人と爲りて愛す性讀書を好む而れども章句を治めず年十五にして弟子員に補せらる年二十三にして帝聿錡に見ゆ帝うの人と爲りを異とし背を撫して曰、朕一女の卿に配する無きを惜む卿まさに忠を吾か家に盡すべ

一と國姓なる朱を賜ひ成功と改名せしめ又尙方の劍を賜へり後ち成
 功國難の日に股なるを見て儒服を孔廟の前に焚き兵を起し廈門に據
 り愈々忠を明室に致せり然るに其後、父芝龍は志を屈して清に降り
 しかば成功悲憤の情に耐へず同志の輩と共に舟に乗じて去り海島に
 據りて屢々兵を大陸に出し或は漳浦を攻め或は潮州に入り勢大に振
 ふ帝之を嘉し使を遣はして延平侯に對し其徒甘輝を崇明伯とせり成
 功大舉して南京を取らんと議し衆數十萬を率ひ北上して浙江に至る
 初め成功は清兵を海澱に破りしとき清主は使をして成功を海澱公と
 爲し招かしめしも成功従はざりしかば是に至りて清主は怒りて其父
 芝龍を高俎に置きまた之を降服せんとせり成功屈せず遂に南京及び
 其他の諸路を下し東南大に震ふ清主大に患ひ親ら征せんとするに至
 りしか成功か軍破れて江南を失ひまた舟に乗じて去り臺灣に據らん
 とせり

是の時清の世祖崩じ第三子玄燁位を嗣く是を聖祖皇帝と云ふ時に我
 か紀元二千三百二十二年後西院帝寛永二年にあたり
 成功已に舟師を率ひ臺灣に逼る臺灣は南紀の曲に位し東は層巒に倚
 り西は巨浸に迫り北は福州と對し南の河沙磯は小琉球に隣り周袤甚
 だ廣く農作物産の利あり芝龍嘗て之に居る幾はくならずして去り荷
 蘭人來りて之に據る是に至りて蘭人を攻め之を得てうの根據と爲
 すし時に清主は成功の父芝龍を柴市に棄て子孫の京に在るものをば
 皆之を戮し各省の沿海及び邊界の居民をして成功に通するなからし
 むし成功は臺灣を占領して魯王を奉りたりしか幾はくもなくして魯
 王殂し成功もまた卒す年三十九其子鄭經衆を撫し明の正朔を奉り屢
 々清廷に抗したりし帝聿健は曩きに緬甸にありしか吳三桂、愛星等
 緬城を征り緬酋帝を執へて其營に送り遂に三桂の爲めに殺さる時に
 明の永曆十七年清の康熙二年にして我か紀元二千三百三十三年にあ

たれり明は太祖即位より此に至るまで凡そ二十世二百九十六年に
て亡ぶ後ち鄭氏永曆の正朔を奉すること二十年通計三百十六年に
て明曆盡きたり而して顧炎武、侯朝宗、魏禧の諸人は清に仕へざりき
と云ふ

明時代には西洋の交通元朝よりも一層開け呂宋に據れる西班牙人東
印度諸島に據れる和蘭人も明と交通し羅馬の教徒も相往來し穆宗の
頃には葡萄牙人ろあへれすとれろふあへとなんとあんどれつと
いもん等澳門に寓居を設け又佛人と好を通し其他我が日本の如き
もろの交通盛に行はれ大内義興細川高國等の如き商賈を遣はし寧波
に至り貿易に従事せしめしと云ふ蓋し漢の武帝の時甘英は使を大秦
國(羅馬)に奉し篠支に抵り大海に臨みて還ると漢史に記せり篠支は
今日の「ソリア」の地にて大海は地中海なるへ彼との交通此時より
して開け宋元時代には愈々盛に往來せしか爲め今日西史家喋くする

所伊國のまるこほろは元の孛羅にて太宗に仕へたりといへどこの所
謂まるこほろは果して孛羅なるや否は知るへからず一説には太祖の
とき書を奉して我國に使せし黒的などりと如此西人の往來頻繁なり
しか爲め毅宗の時には曆局を開き湯若望、羅谷等をしてその事を修
めしめしは有名の事實と謂つへし火器は宋末より行はれしも明時代
にはその用大に廣まりしは西人の功また力なしとせざるなり

清

三藩の變亂

臺灣の平定

聖祖皇帝は已に明の遺族を亡滅し天下一統に歸せしか如しといへど
も外には尙、鄭氏の遺孽明の正朔を孤持して臺灣に據り内には三藩
の争擾あり初め世祖は吳三桂を雲南に封じて平西王と爲し尙可喜を
廣東に封じて平南王と爲し耿精忠を福建に封じて靖南王と爲せり是

を三藩といふ是等の三藩は常に南征の功を待み是に至りて勢甚た熾なりしをも帝は是等の諸藩を徹せんとせしかば三桂は自ら毛髮を蓄へ衣冠を改め天下都督招討兵馬大元帥と稱し兵を擧げて雲南貴州の地を騷し後また國を大周と號し帝號を僭せり耿精忠も亦兵を擧げて反し數月の間に雲南貴州四川湖南廣西福建の地皆賊有に歸し後ちまた陝西の提督王輔臣と云ふもの賊に應じて漢中を陥れ勢甚猖獗なりき

是より先き耿精忠は使を鄭經に通し共に力を併せて清兵を拒かんとせしか後ち互に隙を生し遂に降服して誅に伏せり尙可喜は屢々三桂の招に與かりしも三桂に従はざりしかば其子信之三桂に通して父を幽し兵を擧げて反し後ち廣東を以て降服せり是に至りて三桂孤立して江西を失ひうの疆土日に蹙まり尋いで死す其孫世璠三桂に代り貴陽雲南にて屢々清兵と戦ひしか遂に敗れて滇城に自殺せり是に於て

三藩の争亂悉く平定に歸せり時に我か紀元二千三百四十一年にあり

時に臺灣は鄭經死し次子克塽と云ふもの經に代りて立つるの尙幼なるか爲めに劉國軒、馮錫範等輔佐して兵を督し清兵に抗す帝は三藩平きしを以て萬正色、施琅等の諸將を以て大舉南侵せしむ時に劉國軒は精兵數萬を督し澎湖を守り林陞、丘輝等の諸將を以て雞籠嶼に於て清兵と戦はしむ清兵利あらず琅また眼を射られて一時退く後ち大に兵氣を厲まし國軒を虎井嶼に敗る林陞丘輝の諸將皆戦死し餘衆大抵清に降る國軒勢の敵すべからざるを知り急に舸に乗じて逃る明の遺裔寧靖王術桂また島中にありしか是に至り自ら以らく明家の龍種は義辱かむべからずと殘兵と訣飲して自殺せり臺人爲めに流涕す

琅更に舟軍を整へて鹿耳門に至る國軒、馮錫範、何祐等事の爲すべか

らざるを以て克瑛を奉じて降る克瑛時に年十五瓊は克瑛其他諸將を
禮待之を燕京に送る帝は克瑛に漢軍公を授けて優遇せり鄭成功の
臺灣に據りより是に至るまで二十二年にして臺灣平定し清廷に歸
りたり時に康熙廿三年にして我か紀元二千三百四十三年靈元帝天和
二年にあたり後ち帝は鄭成功は明室の遺臣にして吾か亂臣賊子に
非ずと言ひ特に成功及ひ子の經に南安に歸葬せしめしこと田横か故
事の如かりきといふ

露國の和約

噶爾丹の征討

是より先き露主彼得英邁の資を以て大志を懷き西南の地を拓かんと
欲し土耳其諸國と戦ひしか是に至りて露人は黒龍江地方に侵掠を試
み雅克薩城等を陥れしかは帝は副都督薩布素及ひ都督彭春等を一
て雅克薩城に至り侵掠を諭止せしめしも聽かさりしを以て遂に諸將

を以て水陸兩路の兵を以て並進急攻せしむ城主頭目額里克舍降を乞
ひ遂に雅克薩城を恢復し更に副都統一員駐防兵數百を黒龍江に置き
之に備へしか後ち露主使を遣はし和を乞ふ因りて内大臣索圖をして
乃爾青斯克に會せしむ露人は邊海を勘定し恰克圖に通商し界牌を額
爾古納河に立て侵地を還し七條の條約を結べり一に曰、興安嶺を界
とす、二に曰、「アルケン河」を界とす、三に曰、「アルバシン」城を毀つ、四
に曰、獵戶界を越ゆるを許さず、五に曰、留人を遣還せず、六に曰、貿
易を許さず、七に曰、會盟後の逃逸者は收留するを許さずと是を清
露乃爾青斯克の條約と云ふ時に康熙廿六年にして我か紀元二千三百
四十七年にあたり

帝已に露人と和し黒龍江の界を定めし東海數百里の地を收めまた
親ら厄魯特の噶爾丹を親征せり初め西域に瓦剌の後なる厄魯特の族
ありしうの酋長僧格死ししの子位にありしかは僧格の弟噶爾丹之を殺

して築立し南侵烏蘭布通に至りまた噶爾丹を陥れ遂に騎兵數萬を率
ゐ克魯倫河に沿ひて巴顏烏蘭に至れり帝前後親征してその侵地を奪
ひ噶爾丹に追躡せり時に兄の子策妄拉布坦と云ふもの兵を擧げて
噶爾丹の舊地(伊犁)を併有せしかば噶爾丹進退谷まりて遂に藥を吞
んで死せり是に於て阿爾泰山以東は帝の版圖に歸せしも後數年を
歴て策妄拉布坦は哈密の北境に至り五塞を侵掠し自立して準噶爾可
汗と稱し大に西藏地方を震動せり帝諸將をして西藏地方を討平せし
む準噶爾の兵大に敗れその舊部伊犁に歸るもの殆ど希なりきと云ふ
西藏平定の後幾はくならずして朱一簣と云ふもの中興王と稱し兵を
起し臺灣を陥れしがまた忽ち平定に歸せり

康熙の編纂

西域の平定

帝在位六十一年にして崩す人と爲り英邁不群にして四方を平定し政

事に勵精し綱紀を肅し文教を敷き四庫の館を開き遺書を購求し儒臣
等に命じて書史を編纂せしめたりされは康熙六十一年の間に成れる
所の書淵鑑類函四百五十卷、康熙字典四十二卷、佩文韻府四百四十四
卷、子史精華百六十卷、全唐史九百卷、全金史七十卷、其他經傳史子の
編成等枚擧に遑あらずして後世の學者に大なる利益を與へたり毛際
可、王士禎、朱彝尊、萬斯大等の諸儒輩出して文華の發達盛なりきと
謂つへし康熙の治眞に空しからざるなりし皇子胤禛立つ是を世宗皇
帝といふ時に我か紀元二千三百八十二年中御門帝享保八年にあつた
れり

世宗の時にあたりて策妄拉布坦の子噶爾丹策零立ちて青海羅と藏丹
津と共に兵を擧げ西寧地方を騷擾せしか帝は諸將をして討伐せしめ
遂に和議成りて阿爾泰山を界とし厄魯の游牧民は界東より過ぐるを
得ることを定めたりし帝人物を擧げ文教を崇む康熙の治を隆さすに在

位十三年にして崩し太子弘曆立つ是を高宗皇帝といふ
 高宗の時策零己に死し策妄拉布坦の外孫なる阿睦撒納と云ふもの伊
 黎に入り策零の子を殺して自立し後ち雅爾より西域を制せんとして
 勢甚だ猖獗なりしか後ち内亂の爲めに露國に遁れて死せり」初め阿
 睦撒納の兵を起しとき回部「まふめつと」の二子布羅尼特等は阿睦
 撒納に應じ兵を擧げしか是に至りて回部に還り兄弟また兵を擧げし
 に帝また諸將をして之を討平せしめたり」帝己に西域地方の亂党を
 平定すといへとも後ちまた西南諸蕃の擾亂あり

初め緬甸の木疏土司雍籍牙はうの酋長麻哈祖を弑し自立して邊境を
 侵掠せんか帝は大學士傅恒をして討伐せしむ傅恒の兵を破り侵地
 を反すを約して師を班したり」金川の地は金沙江の上流に位し險要
 なりしか土司沙羅叛し又山東には奸民王倫の亂あり其他循化には回
 教徒及び臺灣の林爽文等の争擾ありしも皆内亂に過ぎされは幾はく

ならずして平定せり」時に安南王黎維祚來降し又廓爾喀をも歸服せ
 り廓爾喀は西藏の西南にあり西は印度の克什彌に隣り南は印度の孟
 加臘に接せり帝之を征服し駐藏の兵を置くに至れり」帝在位六十一年
 にして崩す帝四方を平定し威風大に揚り文武聖祖に類し陳大受、
 張廷玉、王祖、秦蕙田等の名臣朝政に參し殿玉裁、陳羣、紀昀等の儒臣
 輩を用ひて文教を敷けり清の治世をいふもの康熙乾隆を並へ稱する
 宜なりと謂つへし帝の時編纂の大なるものは大清一統志、皇朝通志、
 三禮義疏、四庫全書提要、通鑑輯覽等あり蓋し學術編纂の盛古今を極
 むと謂つへし」太子永琰立つ是を仁宗皇帝といふ時に我か紀元二千
 四百五十六年にあたり

教匪の叛亂

回疆の戡定

仁宗帝の世にありて白蓮教徒河南陝西地方に蔓延して人民を妖惑し

郡縣を抄掠せしは帝は額勒登保等の諸將をして勦戮せしめたり初
め貴州には苗賊の亂ありしかろの遺党教匪に與せしか爲め一時ろの
勢甚猖獗にして額勒登保と戦ひ死せしもの甚た多かりきと云ふ」教
匪平定に歸せし後ち蔡牽と云へる海寇起りて臺灣を掠め粵賊朱潰と
云ふものと連合して浙を侵せり浙江の提督李良庚及び廣東の巡撫沅
元等之を平定せり又是時楊遇春は甘州の賊を平げ傅鼐は黃州の苗賊
を破り後ちまた天里教匪李文清の亂ありて宦官内應し賊の郷導を爲
せしも遂に平定に歸せり」帝在位二十五年にして崩す元を嘉慶と改
む是より先康熙、乾隆の時にありては清朝の勢朝陽の如く輝々とし
て四表に光被せしか帝の時にありては廷臣には謝振の直聲、朱珪の
清廉、劉權の學行、董教曾の宏毅、など有名の人物無きにはあらずり
しも權臣武君億等政を專らし亂民所々に横行し群盜四方に蜂起し帝
殆とろの制御に苦むの傾あり嘉慶の治之を前代に比すれば及ばざる

遠しと謂つべし太子吳寧立つ是を宣宗皇帝と爲す時に道光元年にて
我が紀元二千四百八十一年仁孝帝文政四年にあたり
初め回部南路の參贊大臣斌靜と云ふもの荒淫にして人心を失ひたり
しかば帝の時に至りて博羅尼特の孫張格爾と云ふもの回部の人民を
煽動し屢々喀什噶爾の近傍を侵掠し遂に回城を進撃しろれより英吉
沙爾、葉爾羌等を陥れしか帝は陝、甘の總督楊遇春及び楊芳等を遣は
し回疆を戡定せしめ遂に喀什噶爾の參贊大臣を移して葉爾羌に屯
駐せしめたり時に我が紀元二千四百九十一年にあたり

鴉片の戦争

毛賊の叛亂

回部戡定の後ち幾はくならずして鴉片の關係にて英國と兵端を開け
り是を西洋諸國と戦ふの始めと爲す蓋し英國の支那に通せしは明末
の頃より防まり清の初めに至りては廣東を以て互市場と定むるに

至りしが康熙(聖祖)雍正(世宗)の間より英商は清朝の苛税を病み屢々訴へしが清朝顧みざりしより英の軍艦遂に澳門に碇泊しうの間隙を伺へり是時西班牙、葡萄牙、荷蘭等の往來は既に衰へしか爲め英人は惟り東洋の商權を專にせんとして遂に印度の孟加臘を滅し其欲逐々東洋を壓當せんとせり乾隆帝の時に至りて英人を延き火器を倣鑄し天文を講究せしめ厚く外人を待ちしか清商は英賈に數萬金を借り期に至り歸さるか爲め英人京に往き之を控訴す帝諭を刑部に下して曰詞訟の交渉あるとき民人に徇ひ外夷を抑ふべからずと惟た鴉片販烟一事は之を嚴禁せり然れども英人は已に印度を蠶食し且つ帝の外商を待つ厚に乗し嘉慶(宣宗)の末年より帝の中世に至りては大抵内地至るところとして鴉片を販賣せざるはなし人民はこの有害なる喫烟の爲めに終歲勤勞の資を無にするに至る故に乾隆嘉慶の間兩度まで鴉片數千函を燒滅せしむ人民嗜好愈々盛にして上下昏憊衰弱に陷

るもの夥しかばりしか林則徐と云ふもの上疏して言ふ鴉片烟中國に流入の初め執袴子弟の浮靡を習ひ爲すに過ぎざりしか爾後上は官府より下は工商優隸に至り婦女僧尼道士に及び廣東毎年の消銀三千餘萬かく耗銀の多きは販烟の盛に由る販烟の盛は食烟の衆なるか爲なれば之を禁止して澆風を絶たんと

帝之を嘉みし則徐をして湖廣の總督と爲さしむ則徐命を奉り直ちに禁令を十餘國の外商に敷き廣東に至り英人に逼りてその所有の鴉片を獻せしめ三千餘函を燒却し諸國の互市は舊に依るも惟り英國商人との貿易を禁したりし英主之を聞きて大に怒り遂に支那に向つて開戦を布告し軍艦五艘漁船三艘運漕船二十一艘を以て舟山乍浦等を下し寧波を犯し大に清兵を破れり帝因りて則徐の設けたる各地の兵備を撤し且つ則徐の職を褫ひて和を廣東に議す和未だ成らざるに英人また廣東を犯す清兵之と戦ひて捷たす帝また則徐を用ひ皇弟綿瓊親

王を大將軍と爲し廣東に於て百方防戦せしむ英人償金六百萬兩を得て戦一時止みしも幾はくならずして英の水師また澳門に入り再び廣東を犯し香港厦門を陥れ汕東を攻む清軍拒く能はず定海、乍浦、吳淞皆陥り南京また英兵の衝くところと爲り京城を距る僅三十里の所まで英軍の侵入する所と爲れり」帝の敵すべからざるを知り伊里布琦善に命し英將曠々喳と南京に會合して和を講せしむるの略に言ふ清國は銀二千六百萬兩を納れて軍資及び焚棄せしところの烟價を償ひ廣州、福州、寧波、厦門、上海を以て通商互市の區と爲し香港を割きて永く英國に歸し清英官吏は同等の禮を以て交接し相背くことなかれと焚烟以來數年の戦端是に於て殆めて解けり是を清英南京の和約と云ふ時に道光二十二年にして我が紀元二千五百零二年西洋紀元千八百四十二年なり

鴉片の亂後また長髮賊の内亂ありうの魁首を洪秀全と爲す秀全は廣

西桂平の人なり鴉片の外寇後人民内に苦み盜賊蜂起し清廷の威衰ふるに乗し自ら耶蘇の後と稱し宗教を假り愚民を誘惑し竊かに楊秀清、韋昌輝、洪大全、秦日綱、何震川等の不平の徒と一致して兵を金田に擧げ廣西の諸城を陥れ勢日に炎々として撲滅すべからざるの狀あり其徒皆髮を蓄へ服を易へ滿州政府を覆滅せんとするを以て名と爲す故に之を長髮賊または手賊ともいへり」帝鴉片外亂の後に接するを以て戡定に苦慮せしが遂に之を討平すること能はずして崩せり在位三十年道光と改元す帝の時には内憂外患交々至り實に多事多端の時なりきと謂つべし太子奕訢立つ是を文宗皇帝と云ふ時に我が紀元二千五百零十年孝明帝嘉永三年にあたり

文宗帝即位の時にありて手賊は永安州を陥れし帝は林則徐をして討伐せしめたり則徐途に死し兩江の總督李星沅之に代る時に賊勢益々熾んとして洪秀全は國號を太平天國と稱し自ら天德王と稱し韋

昌輝、泰日綱等も各々僭號を稱し江に沿ひ水陸兩路より金陵(南京)を
陥れ此を據城として蓄妾奴婢の弊及び弓足の害を禁し民心を收攬し
遂に南京に逼り利あらざりしも其將林鳳祥等已に江北の各地を陥れ
其勢支那全國を震動せり李屋沆等の諸將苦戦力を盡しとも亦如何と
する能はざりき

英露佛の和議 毛賊の平定

初め廣東の小吏英船に就きて廣東の民、法を犯し私に役を爲すもの
數人を捕ふ英人之を拒む吏怒りて英の商館を焚く英の領事兵を發し
て黃浦の諸砦を陥れ遂に廣東を焚く清廷は償金四百萬を出し和す幾
はくならずして廣東の民復た英の商船を掠む英の使人之を訴へんと
せしとき清兵白河の兩岸より砲撃せり佛使も亦英の使人と同行中に
ありて此難に遇ひしを以て兩國遂に兵艦を連ね廣東より轉して北河

より進んで天津を攻む帝之を患ひ和を講し一時兩國の兵退きし後ち
和破れ二國また進んで太沽を攻め陥れ北河に溯りて進撃し遂に北京
に逼り圓明苑を焼く帝は之を熱河に避け恭親王をして償金千二百萬
を出し牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢江を以て互市の場と定め
むめたり是を天津條約と云ふ是時魯人大に清英二國の調和を謀るを
務めたり是より先き黒龍江以北の地は魯に歸し烏蘇里江と滿州の
海岸とは魯清兩國同轄の條約と爲りしは是に於て魯國は上の條約を
訂正し兩國同轄の地を得て並に烏蘇里江より朝鮮國境に至り海岸一
帶の地は其所有と爲せり

かゝる英佛の外患に乗じて毛賊は其勢愈々熾んに和議已に成りて英
佛に約せし九江、漢江等の處皆毛賊の據る所と爲りしを以て英佛等
の諸外國は清廷に應援して賊を伐たんとせり時に帝崩す即位十一年
咸豐と改元せり太子載淳立つ是を穆宗皇帝と爲す

帝即位の時に至りて米、英、佛の三國來援して賊を撃つ時に賊勢次第に蹙まるといへども尙ほ浙江より上海を犯せり帝は處士王韜の建議を納れて洋鎗隊を編制し英米人を以て之か將と爲さしむるの隊屢々奇功を奏せしを以て一に常勝軍ともいへり曾國藩の弟國荃及び左宗棠李鴻章等意を恢復に銳くし遂に賊巢を衝き南京を恢復せり洪秀全鳩を飲みて死し餘党皆降服し毛賊兵を起してより十五年にして始めて平定に歸せり帝の曾國藩を侯爵と爲し曾筮を伯爵と爲しその功を賞せり國藩は湖南湘郷の人にて博學にして宏量あり安徽の李鴻章又軍功を以て伯爵と爲る胡林翼はもと此役の勇將なりしか先きに戰没せり洪秀全の叛きて北京によりしより十數年の間二十數省を蹂躪し數百城を淪陥しまた人命を損する幾千萬なるを知らず實に近世希有の内亂と謂つべし時に同治三年にて我が紀元二千五百二十二年にあたり

日清の關係

佛露の紛議

毛賊平定の後ち北狄捻匪また亂を作し北河以北を陥れ進んで眞定府を陥る僧格林沁戰ひて之に死しまた甘肅の回匪亂を生せり左宗棠、李鴻章、曾國荃等代りて是等を勦平せり是に於て國內無事なりしかは帝は好みを各國に修せんとして米國人芭林齋を雇ひ使臣と爲し西洋各國に通ず而れども清人尙舊習を脱せず外人を蔑視すること甚しく天津の民佛國教徒を殺し禮拜堂を焚き延きて領事館を襲ふ佛國之を訴ふ清廷乃ち暴徒十六人を斬戮し官吏二名を竄逐し償金を出し事遂に平くを得たり

是時我が日本國は大政復古の業既に成り清廷に隣好を通ぜんとして柳原前光正使と爲り花房義質鄭永寧等副使と爲り書を奉りて至らしむるの翌年伊達宗城特命全權大臣と爲り更に往き舊好を修し港口數

所を開き互市の地と爲し所謂修好條規通商章程十八條を定めて還る後また外務卿副島種臣を特命全權大臣に任し去歲宗城の議訂せし所の條約を互換せしむ是より先き南米卑露國の船舶清人數百人を拐載して我が横濱に碇泊せしを種臣救ひて清國に歸らしめしことありしが爲め清人之を徳とし種臣の使するに及ひ到る所禮を厚くし待せざるはなかりきといふ是の時始めて我國は領事官を清國に駐劄し通商の事務を辨理せしめたり幾はくならずして清國は我國と紛議を生ぜり

初め我が備中及び琉球の民臺灣の地に漂泊し蕃民の爲めに殺されしかば我國は陸軍中將西郷從道を以て兵艦數隻を率わてその罪を問はしむ蕃民畏懼降るもの相踵く從道専ら蕃民を撫安す清國は其地屬國の關係ありとて我に兵を撤せんことを請求す我が國肯せず兩國の覺是に於て將さに開けんとす内務卿大久保利通命を奉りて北京に使し

論ずる數日議竟に決せず憤然去りて我國に歸り大に決する所あらんとせしが是の時英國欽差大臣威徳と云ふもの北京にあり兩國の間を調停し周旋備さるに至る清廷は銀十萬兩を以て我が被害漂民の遺族を撫恤し又四十萬兩を以て我師征蕃の經費を賠償し和議遂に調ひ從道等兵を引きて我國に凱旋せり已にして清廷は欽差大臣何如璋を我國に駐紮せしめ并に領事官を横濱神戸箱館長崎等に置き又公使を西洋諸國に派遣し情好を通せんとしり是實に李鴻章の建議に出づるものとす」時に英國領事瑪爾額里と云ふもの偶々雲南を過き士民の爲めに殺さる清廷また償金を出し領事の遺族に與へ北海宜昌の數港を開き互市場と爲し成きを求む是を芝罘の盟約と謂ふ」帝在位十三年にして崩し同治と改元せり嗣なり醇親王の子載湉立つ是を今の皇帝と爲す時に我が紀元二千五百三十五年明治八年にあたり

帝の世にありて我國と紛議また起る是より先き我國の琉球藩王を廢

一其地を縣とせり蓋し琉球は嘗て清國の冊封を奉ぜるものなり是に至り清國は琉球を以て日清兩國に附屬せんとし議合せず殆ど兵を用ひんとせしが會々米の前大統領額蘭德東遊せるに際し兩國の爲めに謀りて曰、日本は官古諸島を割きて清國に附し清國は日本に向ひては同治中の條約を修正し琉球諸島を日本に臣屬しその經營に任すべしと議遂に調ひ我が日本との交誼舊に復せり時に帝の光緒五年にて我が明治十二年なり

初め毛賊亂後西疆喀什噶等の亂あり時に當りて露國は西比利亞に兵を出だし遂に進んで伊犁を占領し烏魯木齊以西の民は次第に露國に親從せり帝の時に至り左宗棠を陝甘の總督と爲し西疆を督撫し天山南路を復せり然るに伊犁は魯國の已に占領する所と爲りしを以て清廷は之を恢復せんと欲し兵を境上に出し崇厚及び曾紀澤等をして露國に往來せしめ遂に巨額の償金を出し漸く條約二十條を定めて兩

國紛議の局を結ひたり是を清露伊犁の葛藤と云ふ時に光緒七年にて我が紀元二千五百四十二年なり

後ち數年を歴てまた佛國と和を失ひ佛兵安南より東京を攻め清廷一時佛國の沿海を惱すに苦慮したりしか幾はくならずして事遂に止めり時に光緒八年にして我が紀元二千五百四十二年明治十五年にあたり

明治十五年日本と露國との紛議

支那史綱 下卷終

明治廿七年七月二十三日發行

定價金四拾錢

(支那史綱下卷)



著者 西村 豊

東京市神田區猿樂町三丁目一番地

發行者 宮崎 道正

東京市神田區裏神保町壹番地

印刷者 熊田 宜遜

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所 熊田 活版所

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

東京市神田區裏神保町壹番地

發兌書肆

敬業社

各地賣捌書肆

大坂市備後町四丁目	敬業社出張所	熊本市新町	長崎次郎
東京市日本橋通三丁目	丸善商社	鹿兒島市仲町	吉田幸兵衛
全 通一丁目	大倉書店	山口中市町	育英堂
全 新大阪町	小林喜衛門	滋賀縣大津	淡海堂
全 神田區表神保町	中西屋邦太	甲府市	柳正堂
全 京橋區竹川町	共益商社	信州松本	水琴堂
全 南傳馬町	吉川半七	全 長野大門町	高美書店
全 大坂市備後町四丁目	梅原龜七	全 上田	西澤喜太郎
全 南區心齋橋	石井鈞三郎	全 越中富山市	同支店
全 北久太郎町	吉岡平助	全 四十物町	大橋甚吾
全 北久寶寺町	松村九兵衛	全 越後水原	中田書店
全 名古屋市本町三丁目	柳原喜兵衛	全 新潟市學校町	西村六平
全 玉屋町	三木佐助	全 千葉縣千葉本町	櫻井產作
伊勢津市大門町	川瀬代助	全 橫濱市辨天町	多田屋支店
和歌山市本町	片野東四郎	全 仙臺市大町	丸屋書店
高知市種崎町	河島九右衛門	全 岩代郡山	文庫學館
福岡市博多中島町	平井文助	全 山形市七日町	高藤書局
全 筑後久留米市米屋町	澤本駒吉	全 羽後秋田市大町	富屋久之丞
長崎市酒屋町	森岡書店	全 北海道札幌南一條	五十嵐太右衛門
佐賀市白山町	積善館支店		牧野徳太郎
	菊竹書店		鈴木鐵治
	安中半三郎		小鹽武吉
	河内壯助		萱間左右太

敬業社出版歴史畧目録

敬業社編纂

日本小歴史

全三冊

上卷上古史、中古史
中卷近古史
下卷今代史

上卷

定價金二十五錢
郵稅二錢(四版)

中卷

定價金三十錢
郵稅四錢(三版)

下卷

定價金二十五錢
郵稅二錢(再版)

敬業社編纂

六版 萬國小歴史

全一冊

定價金二十錢郵
稅二錢紙數百頁

此書ハ主トシテ諸官立學校入學受験者及尋常中學生諸君ノ參考ニ供スル爲メ編纂シタルモノニシテ勉テ繁ク斥ケ簡ク取リ記憶ニ便ナラシム故ニ歴史ノ如キ記憶ヲ要スルノ科目ハ如此簡單ノ書籍ニヨリ必要ノ事實ヲ知ルニ非ラサレバ容易ニ及第者ノ員ニ加ハル、能ハザルベシ殊ニ現今諸官立學校入學試験科目ノ多數ナル其困難知ルベキナリ且此書ハ歴史上ノ事實配列ノ順序其宜キヲ得タルヲ以テ管ニ入學受験者ノ爲メノミナラズ一般ノ教科用又ハ參考用ニ供スルニハ至便至益アルベシ

二 越溪 西村豊君著

支那史綱

全二册 上卷定價金三拾五錢 郵稅金八錢〇下卷定價金四拾錢郵稅十錢

本書ハ獨ノウエルテル氏ノ萬國史唐ノ李潯氏ノ蒙求ニ倣ヒ一切理論ヲ去リ記事ヲ主トシ且ツ治亂興敗ノ沿革ヲ詳明ニシ以テ中等教育諸子ヲシテ背誦ニ便ナラシメタリ己ニ東京府立城北尋常中學校ニモ教科書トシテ採用セラレタレハ中等教育諸子一讀シ其益ナル所蓋シ鮮少ナラザルナリ

谷將軍序 東海散士編

埃及近世史

全一册 定價金壹圓郵稅金十錢 紙數五百五十六ページ

東海散士ガ奔逸雄健ノ筆ト周到緻密ノ思想トヲ以テ彼ノ中興ノ英主明平滅土阿梨ヨリ忠臣亞刺飛將軍ノ敗蹟マデ百年間ノ政治經濟宗教教育農工商風土人情ノ變遷歐人ノ崇拜皮相ノ開化等一モ漏スナシ連綿數千年ノ古國ガ亡滅殆ソド救フ可カラザルニ赴キシ由來ヲ寫セシ大著也又其序文ニ至テハ谷將軍ガ亞刺飛將軍ヲ錫倫島ニ吊ヒ埃及ニ遊ヒテ感慨ヲ起シタル落淚ノ辭ナリ將軍ノ文章散士ノ筆力ハ既ニ世人ノ熟知スル所ナリ又本書ハ本邦人ハ就中參政者ノ必ズ一讀ヲ要スル良書ナリ江湖ノ諸彦幸ニ一閱ヲ賜ハテ幸甚

◎敬業社出版地理學天文學略目錄

理學博士小藤文次郎君編纂

三 地理學教科書

全壹册 定價金七拾錢郵稅八錢紙數百四十二石版木版着色圖數多挿入

巽ニ文科大學教師教育學專門博士トシテ、ハウズシネヒト氏山口高等中學校ノ爲メ教程ヲ編成セラレ次テ學士會院ニ於テ演說シ況シ之ヲ世間ニ訴ヘ氏ノ設圖ヲ本邦ニ普及セシメシメテ盡力セラレタリ氏ノ設圖ハ自然ニ伴フ教育法ニシテ身體ト腦力發達ノ度ニ順シ漸チ透テ粗ヨリ精ニ入ラシメ尙高等小學ト中學豫備科ヲ合一シ初等地理ヲ三年間信習セシムルニアリ理科大學教授トシテ小藤文次郎氏ハ前條ノ教育主旨ヲ大ニ贊成セラレ本邦ハ主トシテ其第一級ニ適合ス可キ教科書トシテ編成セラレタルモノナリ編成ノ順序已ニ如斯加之著者其人ヲ得タリ蓋シ此書ノ出ツルハ斯學ニ一新時期ヲ與フルモノト云フモ不可ナカランカ世ノ教育ニ從事スル諸君及斯學ヲ研究セントスルノ士ハ宜シク一本ヲ購フテ虛言ナラザルヲ知ラレヨ

故理學士富士谷孝雄君編纂

中等教育 日本地理教科書

全壹册 定價金八拾五錢郵稅金十錢紙數四百二十一頁銅版明細着色圖數多入

故富士谷先生ノ地理學ニ精選ナルハ世ノ業已ニ熟知スル所ナリ本書ハ先生ガ多年研究ノ學理ト數年

經歷ノ實験トナ根據トシ成ク農工商ノ現況ニ説及ボシタル斬新完璧ノ良著ニシテ其尋常中
 學并師範學校其他同程度ノ諸學校ノ教科書ニ適當ナルハ固ヨリ論テ俟
 不荷モ日本地理ノ真相ヲ識ラント欲スルノ輩ハ宜シク一閱ス可キノ價値アルヲ信ズルナリ弊細幸ニ
 請テ之ヲ發行スルノ榮ヲ得テ仰キ願フハ大方ノ諸君ヨ速ニ一書ヲ購讀シテ我帝國今日ノ形勢ヲ覺
 知セテフレンヌ

志賀重昂君述

版六 地理學講義

全壹册 定價金三拾五錢郵稅金
 四錢紙數百五十一頁

是レ聊カ東西在來ノ地理學考窮法ニ別機軸ヲ出シタル者ナリ、全國公私學校ノ教員齊シク此書ニ參
 考シ此方法ニ據リ實地教授スル旨ヲ報告シ來ル者三十五私立學校、六十九中學校師範學校、百五高
 等小學校アリ、又個人トシテ此書ニ據リ現世界ノ趨勢ヲ考窮スル者甚ダ多シ第六版ハ更ニ許多ノ新
 意見新造語
 ● シ ャ ツ パ ン メ イ ル 新聞第五版詳評 (前略) 此講義ハ
 意見ヲ發表スル間ニ演述シタル者コソテ其人望アルコトハ日本國ニテ皆知レリ、此書ノ著シキ特色ハ
 其組織ナリ、著者ハ力ヲ乾燥ナル事實ヲ舉者ノ腦裡ニ注入スルコトヲ避ケ地理學ヲ考窮スルノ興味ヲ
 學者ニ惹起セシム且如何ニシテ最モ有益ニ斯學ヲ考窮スルヤノ方針ヲ指定シテリ、著者ハ又絶ニ高
 學者トシテ斯學ヲ考窮スルニ記憶力ニ依ラズシテ考思力ノミニ是レ頼ルベキ事ヲ曉述セリ(下略)

44
237

121

121

003096-002-5

44-237

支那史綱

西村 豊/著

下

M27

ACC-1108





